

Title	本邦中世に於ける大学中庸の講誦伝流について：学庸の古鈔本並に邦人撰述注釈書より見たる
Sub Title	
Author	阿部, 隆一 (Abe, Ryuichi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1962
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.1 (1962.) ,p.3- 84
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000001-0003

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

本邦中世に於ける大学中庸の講誦伝流 について

——学庸の古鈔本並に邦人撰述注釈書より見たる——

阿 部 隆 一

緒 言

大学・中庸の二篇を礼記より表章して四書の一となし、經書の地位を確立せしめたのは朱子である。しかも朱子学の綱領を示すものは学庸である。従つて我が国の学庸の伝流を尋ねること、即ち朱子学の伝来を迎ることに外ならない。朱子学伝来の起源については諸氏の説が区々として一定しない。併し何年何某がそれを初めて我が国に伝えたかを採り断定することは大体無理である。要するに鎌倉時代の日支禅僧の往来交渉師資相承の間に伝わり、初め禅林の間から漸次世に滲透したもので、仁治二年帰朝せる聖一国師円爾の将来本の中には、晦庵大学中庸の書名が見えておる。併し朱子学が漢唐古注学に対し、新学或は新注として意識的に講究され出したのは鎌倉末である。即ち後醍醐天皇側近の廷臣による玄恵法印を師とする有名な新学講筵の活動である。

宋学と禅宗との密接不離の關係はその成立以来の因縁であるが、我が国に於ても、南北朝以後は禅僧の語録詩文中に、学庸の講書から得た素養を思わしめる辞章が次第に多く反映され、義堂周信の如きは学庸を提げて為政者に教

化を試み、終に漢唐の古注を墨守した博士家にも新注が浸入し来つて、清原家の如きは早くからその講説を開くに至つた。中原康富の「康富記」等を見れば、既に室町前期に於て、学庸は従来の孝経と並んで、神縉子弟の読書始の教科書として行われる程の普及を見せておる。

朱子学の本領とする儒学再興の革新的な清風は、建武中興の前後を渦巻く革新的機運を映発する当時の新学派の一部にその微兆を見るにすぎず、中世期を通じての学庸の講読は、概してその学風に於ては、依然として漢唐注疏を朱注元明末疏に換えた字義の講釈に終始しておる。その間にあつて、鎌倉末、花園上皇は新学に対し透徹せる御理解を蘊蓄され、その得失を甄別して内在的超越的批判を試みられ、朱子学伝来当初にあつて、後世江戸期の鴻儒の到達した結論を夙に余蘊なく示し賜うた。上皇の御見識は群山を懸隔して高く天空に孤峰と聳えられ、不幸層雲厚く峰をかしく、雲霧を披いて天日を仰ぐことは庸儒の能くする所ではなく、御学風は永くその後を継ぐ者がなかつた。

中世時代の学庸講書的情況については、既に西村天囚博士の「日本宋学史」足利衍述氏の「鎌倉室町時代之儒学」の名著、近くは芳賀幸四郎博士の「東山文化の研究」「中世禅林の学問および文学に関する研究」等に詳かである。併し学庸に関するこの時代に成立した専著の撰述は、僅に残つた所謂の仮名抄の外は極めて乏しい。上記の論考は主として禅僧の語録・詩文集、神縉の日乗等に見えた資料を点綴し、少しく仮名抄を利用した考察である。併し学庸を当時如何に誦読したかの実情を物語る資料としては、その当時書写し使用された学庸の写本、室町時代盛になつた内大典の講釈筆録に始まつた抄物に若くものはない。学庸の古写本抄物の調査は足利氏が先鞭をつけられたが、その後殆ど進んでいない。従つて筆者はこゝに、先行の論考とはやゝ考究の方法を変え、慶長頃までに書写された学庸の古写本、それに準ずるものとして、室町時代末迄に将来され特に当時の書入れの存する宋元版及び慶長古活字版、並び

に学庸に関する室町時代末までに撰述された邦人の注釈書類を調査資料の対象に選び、それ等の現存本を全国に博く搜訪し、その一々を査点し、諸本間の脈絡を貫通せしめて、その伝系を考え、以て日本儒学思想史の一側面を明らかにしようとした。数百年に亘つて天変地異や打ち連なる兵革回祿の人災を免れて現在幸に残つた本は、当時見在の数より見れば正に九牛の一毛に過ぎぬであろう。従つて、以上の資料に限定して考察を試みた本稿は、一斑に眼を奪われて鵠的を外れぬよう意を用いたが、中世時代学庸伝誦の全貌を如実に反映叙述し尽し得たとは必しも保し難い。中世の学庸の遺典の上に見られるものから、具体的に当時の講学の史的推移の経緯を明かにしようとするのが本稿の目的である。

一 大学古鈔本

学庸章句は朱子が畢生の心力を傾尽した所で、当時その改訂に力めて易簧に至るまで筆を止めず、その年譜に徴するに、臨没前数日なお大学誠意章を改めた。この誠意の章の更定が朱子の絶筆と言われる。従つて定稿に至る迄幾次かの未稿本があつたわけである。現在四書集註には二種のテキストが伝わる。一は宋淳祐版大字本等の宋元槧本の系で、二は四書大全本等の明版以後の現行本である。こゝには以下便宜上前者を旧本、後者を近本と略称することにしよう。近本が初めて現われたのは、宋の興国の刊本、宋末の建安の祝洙の四書附録に始まると云う。両書とも現在伝わらないが、元の倪士毅の編になる四書輯釈に引く所によれば、

惟祝氏附録本、文公適孫鑑書其卷端云、四書元本、則以鑑向得先公晚年絶筆所更定而刊之興国者为拠。

と。即ち興国刊本というのが、朱子絶筆の更定本だと称したのである。元に入り士毅の師陳櫟は発明を編し、また四

書考異一卷を撰して、両本の得失を弁じ、士毅は先師に従い、近本を定本となした。永楽勅編の四書大全が士毅の輯釈を襲勦して、それが科擧の官撰参考書となるに及んで、日本は地に墜ちて癡れ、現行本は殆ど大全本の系統である。併し、祝本に溯源する近本が果して朱子絶筆の改訂定本であるか否かは大に議論の分れる所で、遽かに定め難い。両本の異同については、清の呉志忠の「四書章句附考」の校勘記に詳かで、両者の得失は同書の巻首に附した「四書章句集注定本辨」に志忠の父英が近本の偽を難詰弁論している。

我が国に四書朱註が渡来して以来のテキストについては、既に足利衍述氏が「鎌倉室町時代之儒教」に明にし、吉沢義則博士に「我が国に於ける学庸朱註の二分流」(「国語説鈴」収)の論文がある。先に結論をあげるならば、慶長時代迄、即ち儒学の権威がまだ朝廷の博士家に占められていた間、我が国に通じて行われたのは、旧本である。江戸時代に入つて学风が一変して、明の朱子末流が流行するにつれて通行したのは大全本系の近本で、爾来旧本は漢土に於けると同様現今に至るまで顧みられず、その存在すらも忘れられている。大学は鎌倉時代将来されたことは明かであるが、伝存の古写本は室町中期以前に溯るものがなく、その殆どが清原家点本に属する。

(4) 清原家本

(甲) 文亀三年清原宗賢加点永正二年小槻宿禰奥書本

京都大学附属図書館蔵(近世初)写本一冊

改装、茶色墨流し古表紙(二五・五×一九糎)。外題「大学」と墨書。烏糸欄(一九・四×一五・七糎)有界七行各行十四字、注小字雙行。朱筆にてヲコト点句点、墨筆にて訓点振仮名を加えること詳細。尾に「宣条」の朱印あり。伏原家旧藏本。訓点中所々、伏原宣条(寛政三年薨)が、左右両傍に二つ以上の読み方のある場合、己の違ふ方

に「条从」、或は「条」と注記して送り仮名を追補してある。奥書左の如し。

此本加一見朱墨両点無相違頗可謂証本矣／文亀第三卯月初十 清三位入道常益桑門隱徒判

借請清給事中宣賢本令書写同点之今日終功畢／永正二年五月十九日 左大史小槻宿禰判

以故入道証明之点本被遂其功訖寔為後葉龜鏡而已／給事中宣賢判

天理図書館蔵永正十三年秀歌書写单経本一冊

改装、納戸鼠色地空押亀甲繫表紙（二七・五×二〇・五糎）、表紙左肩に室町末の筆で「大学」と墨書。裏打補修を加え、十二丁。字面高さ約廿四糎。每半葉十行各行十六字。注文なく、序・経伝のみ。朱墨両様の筆で訓点を附しヲット点は文字中央の「ノ」の点のみが加えてある。

本文同筆の奥書に、

永正十三年六月廿六日書写畢

写点本之奥云／此本加一見朱墨両点無相違頗可謂証本矣／文亀第三卯月初十／桑門隱徒判

借本点等可明謂由奥書之間／書写畢

永正十四年二月廿八日 秀歌

この本は前掲本に比し、ヲット点を送仮名に直し、送仮名にごく些少の差ある以外はほぼ一致する。

神宮文庫蔵〔近世初〕写本一冊

栗皮表紙（二七・八×二〇糎）。字面高さ約廿糎。每半葉七行各行十五字注小字雙行。「興聖寺公」（宇治にあり）「江藤文庫」（江藤真澄）の蔵印、尾に「欽賞」の墨書とその下に「古経堂」の印が捺してあり、釈徹定の旧蔵で

ある。廿六丁。朱筆ヲット点墨筆訓点を附す。眉上に「四書詳説」(後述参照)から特に各章意を明かにした注を抄録したものを主とした書入がある。この首書の中には外に輯釈からの孫引と思われる四書通や他の經書の注の節録も入っている。奥書は「本云」として、前掲京大蔵本と同文。

神宮文庫には別に雙辺七行の古活字本あり、それには朱筆ヲット点墨筆訓点が移写され、その祖の点本の奥書も転写してある。その奥書は永正二年小槻云々の条が最後に来る外は前掲京大本のそれと同文で、その次に、

以清家累代之証本写之不可有一画之相違者也／于時永祿亥八月日／由庵／行正カ(陰刻朱印)

と。この活字本には朱序の部分には四書通義その他の諸注を抄録したかなり周密な書入がある。この本の点は永祿書写本から移したものである。

東京大学国語研究室蔵〔近世初〕写本一冊

改装、丹色渋引行成古表紙(二七・五×二二糎)を覆表紙とし、本表紙は本文共紙。それに「大学」と外題。廿七丁。烏糸欄(二二×一八糎)有界七行各行十七字注小字雙行。墨訓点朱点朱引を附しヲット点は加えてない。奥書に此加一見……文亀三……桑門隠徒判

以故入道証明……清三位入道宗尤／給事中宣賢判

借請給事中宣賢本……永正二年五月十九日大宮官務時元左大史小槻宿禰判(以上省略の文は京大蔵本と同文)

永祿二年十月十九日日本書併点句読一筆了功／遁白

元和七年五廿六日

後表紙の見返に「加修補訖 嘉永六 丑 歳八月二日／正三位侍従ト良熙」の識語がある。即ち本書は宣賢の実家たる

吉田家旧蔵本である。

以上の諸本はいずれも、文龜三年に清原宗賢（業忠の子、宣賢の養父）が加点了証本を、小槻宿禰（時元）が宣賢から借り請けて、永正二年に書写し、それに宣賢が加証を与へた清家本からの転写である。清原家で学庸章句を講じたのは、何時に始まるか明かでないが、清原良賢（南北朝末から応永間）・業忠は度々此を講じておるから、かなり前に証本が成立していたと見るべきである。併し、現在は宗賢点本より先行する清家本が伝らない。

(乙) 清原宣賢加点名

京都大学附属図書館（清原文庫）蔵永正十一年清原宣賢手写加点名一冊

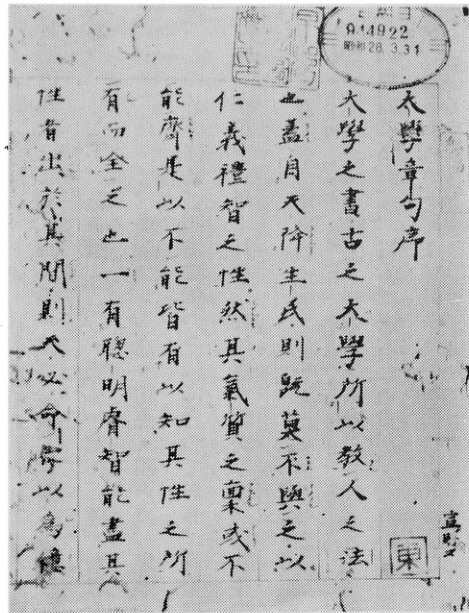
茶褐色表紙（二七・四×二一糎）、表紙左肩の貼題簽に「大学 全」（他筆）と墨書。首に「船橋蔵書」「東」の朱印あり。廿七丁。烏糸欄（二〇・三×一七・二糎）有界七行各行十四字注小字雙行。初葉欄外右下端に宣賢の自署あり。全卷に亘つて、朱筆ヲコト点・句点・四声点、墨筆の訓点を加えること甚だ精密で、所々行間に音義注反切を傍書。この音注は殆ど四書輯釈のそれに合つておる。卷末奥書に曰く、

永正十一年十月廿二日以唐本終書写之功即加朱墨訖

少納言清原朝臣（花押）

宣賢 一大永四・七廿七 八月二日 一大永五八九月十二日 天文十六
同四三日ケ度購之 同十五日三ケ度購之 於越州私宅購之 於越州一乘谷安養寺購之

この奥書によれば、祖本は唐本とあるが、それが如何なる本であつたかは明かでない。併し本手写本のテキストは旧本であるから、それは輯釈や大全本系の明板ではなく、宋元板の類であつたのであろう。宣賢の大学章句の手写本はこの永正本以外に、此よりも後年の写にかゝると思われる後に解説する国字解の自筆稿本「大学聴塵」が存し、そ



京都大学附属図書館蔵清原宣賢手写手点大学章句

れには経注共に全載し、詳細な点を加えてある。点は両本とも変りはない。宣賢は諸経書に亘つて、清原家の家本に改点を加え、その定本を刊定した。併しこの宣賢点を前掲の宗賢点と比較すると、送り仮名に於て、些末の点では、僅少ではあるが、多少の出入異同省略の相違が見られるが、本質に於ては殆ど差異を認め難いと言つてよい。宣賢も累代の家点本を殆どそのまま襲承したものと見える。それも清家が独力で加点したと言ふよりは、鎌倉以来次第に成立した諸家の点を整齊したと見るべきであらう。

学庸はもとゞゞ礼記中の一篇であるから、この清家点もその経文の点は、頼業以来累業の礼記の点に対照すると、ほぼ一致し、それに因循し来つていることが判明する。その朱注の訓点も経文同様王朝以来の博士家の訓法に遵つて読んだもので、殆ど完備したものである。併し礼記点は鄭玄注により、学庸は朱注による。学庸の点は可及的に朱注に即して幾分改めてあるが、まだ朱注に抵牾する読み方を極めて僅かながら残しておる。この齟齬については宣賢は既に気づいておつた。一例をあげれば、宣賢晩年の講義と筆者は推定する後掲の大学抄（清家大学抄甲本）の中に次のような記事を見出す。伝の首章の「大甲曰、顧諟天之明命」の条に、朱子は音注に「諟古是字」と、また「顧謂常目在之也、諟猶此也、或曰審也云々」と注する。從

の清家点は「願ミテ天ノ明命ヲ諱トス」と訓ずるにつき、抄に曰く、

太甲曰！、先王ト云字カアルソ、願^ヲ諱^{トス}ニ天之明命^ト、点チヤガ心得ヌソ、願^ル是天之明命^ト云心ソ、天ノ与ヘタ明德ノ処ニ心ヲ付テミレハ明ナソ、心ヲ付テ見テ其事ニ功ヲ積テ、心ヲ余ニ移サヌ処ソ、是モ尙書^ノ篇也、天ノ明命ト云ハ、明德ソ、天カラ人ニ此徳ヲ命令スル心ソ、人ノ方カラハ、天ヨリ得タ徳チヤ程ニ、明德ソ、是天^ノ明命ヲ願ルト云ハ、虱^シヲ見テ車輪ノ如クナト云タヤウニ、余之心ヲ迂^カサヌ処ソ、又諱^コ審也、願^カ祥^カヨム義ハ惡ソ、住在之^タ々ハ明命ノ処ソ、明德ソ、何トシテ古点ハヨウタヤラウ知ヌソ

と。併し、宣賢の点本のいづれを見ても所謂る古点に従つていて、指摘の如く改めていない。このようなことは中庸についても同様であるのは後で言及したい。宣賢も正式の家本としては妄りに家点を改めなかつたものであろう。

この宣賢点本が定まつて以来、学庸に於ても清家証本が我が国の経学界の最高權威と仰がれ、室町後期から近世初に至る間大学中庸の諸本は殆どその埒外を出ない。以下解説する現存大学古写本類はその訓点は写本の性格上些少の省略出入の差が相互に見られるのは免れないが、いずれも宣賢点に準拠した清家本に属する。

宮内庁書陵部蔵（室町後期）写本一冊

後補の香色地空押行成表紙（二七×二二・五糎）。元表紙は本文共紙、その左肩に「大学」と題書。「吉田神社社司中臣隆啓朝臣之章」「鈴鹿氏」の蔵印記が巻初にあり。廿七丁。字面高さ約二一・五糎。每半葉七行各行十四字注小字雙行。朱筆ヲコト点、朱筆訓点四声点を附す。奥書に、

稟迨遙禪定内相敝命仰息男業賢令書写／以累家祕説点進之此篇入徳之初門也止／善之奥室也最可服膺而已／
從三位行侍從清原朝臣宣賢

本写本は宣賢が三条西実隆の命によつて、長男業賢に書写せしめ、祕点を加えて進めたものゝ転写本である。書陵部並に諸氏の目録・論考にこの本をこの奥書の原本の如く録しているが、筆蹟は宣賢業賢のそれではなく、その頃よりあまり降らない頃の移写にかゝる。

曼殊院蔵三条西実隆書写本一冊

水色地に金泥水辺草花文様鳥の子紙表紙(二七×二一・五糎)。見返し金砂子散し、大和綴。裏打補修が加えてある。首葉に鐘形の「曼殊図書之印」の蔵印あり。字面高さ約二三糎。每半葉六行各行十六字注小字雙行。朱筆ヲコト点墨筆の訓点詳細。墨付廿九丁。卷末奥書に、

右一冊者逍遙院前内相府真ノ迹也虎爪垂露可謂黃絹幼婦ノ一覽之次

曼殊院宮奥書御所ノ望之間堅命依難辭拭老

涙染禿毫ノ以記之而已ノ 天正歳舍壬辰夷則下旬權中納言兼成

禿齡七十九

と。權中納言兼成は三条西公条の男であるが、出でて水無瀬英兼の跡を嗣いた。本写本は実隆の堂々たる筆写本で、清家点を忠実に加えてある。実隆が大学を書写したことについては、「実隆公記」明広六年五月十九日の条に「甘露寺中納言入来、……大学料昏携之、予可染筆之由、所望也」、翌年八月十四日、「大学終書写功、遣甘露寺中納言許、則称礼来」という記事が見える。勿論所掲本がそれに該当するののか、どうかは分らない。

陽明文庫蔵〔室町末近世初間〕写本一冊

縹色表紙(二八・五×二一・五糎)。その左肩の貼題簽に「朱氏註大学 全」と。烏糸欄(二一・五×一七・三糎)有界六行各行十三字注小字雙行。ヲコト点は附さず、朱点朱引墨筆訓点を附す。四二丁。巻首に、「陽明蔵」の朱印。

本書は朱序にのみ倪士毅の輯釈注を雙行に挿入してある。當時は講書に際して序に特に重きをおいたので、それが漸次序にだけ広く依準された疏類を挿入するテキストの一形式が生じ、古くは隋の劉炫の述議を孔序に節録挿入した古文孝經直解の類である。本写本はこうした當時の講学の慣習から起つたテキストの一種型である。本写本輯釈注に竄入の存することは後述に譲る。前記の「顧諱天之明命」を清家点系の中でこの本のみが「諱」の天の明命を顧みる」と訓んでおる。序に輯釈注を挿入すること、言え、本写本は室町末近世初に現れた清家本の一変形と見なすべきであろうか。或はこの写本は訓点のみほゞ清家点によつて附したのであろうか。

清家点本に属する筆者未見本に成篋堂文庫藏室町末本大学中庸二冊、内藤湖南博士旧藏武田長兵衛氏藏慶長十八年識語写本一冊が存する。前者は、「成篋堂文庫善本書目」によれば、「每冊尾に天正元年清原枝賢手識あり、即ち枝賢が快盛律師の為に累家の祕本を書写せしめたるもの、清家訓点并に乎古止点を施したり。」と。後者は、「恭仁山莊善本書影」掲載の起止二葉の書影によれば、巻尾（恐らく遊び紙か後表紙裏なるべし）に「釈迦院常住」の識語と別筆の慶長十八年云々等の殆ど落書に等しい墨書がある。本文は写真だけの判断では正確を期し難いが、慶長十八年よりやゝ古い書写であらう。附訓は首半葉の書影から見ると清家点である。

更に「成篋堂善本書目」には、室町写本大学章句一帖を録し、その解説に、

有界八行十八字。注雙行書写。朱墨点並に頭注・傍注を施せり。巻末に「御本云明応七年五月廿三日受大外記師富朝臣訓說畢小納言章長」の識語あれど、本書は稍後の移写なる可し。別に、同筆にて「主三慶」の識語あり。新井島田両氏旧藏。

と。室町時代に入ると菅原・中原両家とも、經書は清原家の説を受けることが多く、その家本訓説も相互に区別が

き難くなつておる。特に中原家は清原良賢・業忠に学庸の講説を聴いておるから、本写本は恐らく清家本の一つであろう。「主三慶」とあるは三十郎で、清原枝賢の門人である。

大江文城氏は「本邦四書訓点並に注解の史的研究」中に、一休和尚の弟子天紹育禪師の書写にかゝる大徳寺真珠庵蔵の延徳頃写大学章句一冊を紹介された。同庵の話では、今この写本は蔵書中に見当らぬということである。大江氏の調査によると、同本の訓点は送り仮名に多少の差異はあるが、清家点とは大同小異のようである。博士家点に則つたものである。

次に列挙する古活字本大学章句はいずれも、日本のテキストを翻印したもので、恐らく清家本を底本としたもので現存本の殆ど全部が清家点を移写した書入を存しておる。

慶長四年刊勅版单経本（陽明文庫蔵、清家点の移写あり）

今関正運刊第一種本（大東急記念文庫蔵、清原秀賢蔵印、清家点・頭注傍注に清家抄からの抄録あり）

同第二種本（成篁堂文庫、神宮文庫、天理図書館蔵）

無刊記左右雙辺有界七行十七字本（大東急記念文庫蔵、清家点の移写、前掲秀賢書入に類似の書入あり）

（四） 桂庵刊延徳本大学

桂庵玄樹が文明十年島津家の礼聘に応じて鹿児島に入つて教化を施して以来、近世初の文之玄昌に至る迄、程朱の学を奉じた特異の学風が薩南に起り、その新註の訓法は文之点として江戸初期の儒学界に多大の寄与をなした経緯は諸氏の論述に明かである。文明十三年六月桂庵が島津家の国老伊地知重貞と謀つて朱子大学章句を上梓したのは、我が国の四書新註開板の嚆矢である。併しこの文明版大学は不幸今伝らない。この板木が水火兵革の惨にあつて毀れた

のか、その後十二年を経た延徳四年（この歳明応と改元）に至つて桂樹禪院に於て再葉を見た。此が延徳本大学と稱され、故天囚西村時彦博士藏本が海内の孤本として喧伝され、今大阪大学文学部図書館懷徳堂文庫に宝重せられる。筆者は不幸にして未だこの本に眼福を恵まれる機を逸しているが、幸に天囚博士は嘗て大正十三年此をコロタイプ版に印行して世に頒たれたので、この影印本によつて解説する。博士は同書の巻跋解題中に曰く、

是書。按巻尾猶存重貞文明辛丑初刻識語三十字。次有延徳壬子再刊識語十二字。匡郭横四寸二分。豎五寸三分。四周単辺、行間無界。板心有大学二字。連朱子序与正文。計三十五葉。每半葉八行。々十五字。々々三分余。註字与經同。内閣影鈔本首尾猶完好。是本則第十三葉至第十六葉。係後人補写。訓点亦後人所加。而蠹蝕汗損。殊為可惜。彦因欲更獲一善本。訪求多年。遂不能得。則知是書為海内孤本。可不宝重哉。嘗竊以謂。是書版式与今本異。字大悦目。必有所本也。既而読清陳仲魚經籍跋文所載宋淳祐本四書跋。引大学序末原跋云。經註字等。實便觀読。又云。每葉十六行。々十五字。註作大字。低一格。並与是書合。陳氏以今本対校。其命維新。淳祐本作惟新。古之欲明明徳。欲其必自慊。作欲其一於善。此以没世不忘也。註詠歎淫佚。作淫液。是書皆与今本同。而先慎乎徳註。先慎作先謹。避宋朝諱。則与淳祐本合。可知是書依倣淳祐本。其經註異文。従通行本而改之。而慎作謹者。則仍存宋本之旧矣。其字極精。往々用碑帖体。先生審定以為桂菴手筆。今觀巻尾再刊識語。楷法遒美。与經註正文出於一手。可謂其言不誣矣。嗚呼是書存淳祐大字本面目。而桂菴真蹟。独頼是書而伝。豈不重可珍重耶。

と。本書巻尾の刊記に、

文明竜集辛丑夏六月／左衛門尉平氏伊地知重貞／命工鏤梓於薩州鹿兒島／延徳壬子孟冬／桂樹禪院再刊とあり、桂樹禪院は桂菴住持の寺である。刊記の次葉（遊び紙）に左の識語があるが、虫蝕甚しく識読し難い。

此二冊○○○○月○○村大聖寺之ノ住持被下候持主同村○若王寺ノ住僧東持院頼得之ノ慶長十一年丙癸○○日
給之

本書には全巻に亘つて、室町後期頃の筆蹟で訓点を加えられてある。この訓点は清家等の博士家点とはかなり異なつたもので、王朝以来の博士点に対し新に四書の訓点を附した岐陽方秀の流を汲む「桂庵和尚家法倭点」に述べられた訓法と合致する。西村博士は本書を淳祐大字本の面目を存すと称するが、果してそうであらうか。本板が経注共に大字、序と正文連る等の板式は確に宋大字本に通ずるものがあるが、テキストの上からは、款行の一致のみを以てその系統を断するのは論外である。淳祐本即ち旧本と近本との相違点をとつてこの書と比較しよう。

旧本 近本 延徳本

(一章注) 皆当至於 (旧本中淳祐本等は至に作り 皆当止於 同上

本邦鈔本その他は止に作る)

(一) ") 一於善 必自謙而 同上

(伝二章経) 惟新 維新 同上

(伝三章注) 咏歎淫泆 咏歎淫液 同上 (補写は泆に作る)

(伝七章音) 程子曰身有…… 作心至去声十三字は

作心忿弗……去声 程子至作心十字の前にあり 同上

(伝八章注) 加審 加察 同上

慎乎徳註の慎を宋朝の諱を避けて謹に作つたと云うが、近本も旧本と同様やはり謹に作つてゐるから、此は特に宋

本の旧を存したという証拠にはなり得ない。かくの如く延徳本は淳祐本等と毫も一致せず、悉く輯釈大本系の近本に合致する。従つて、博士が「是書依倣淳祐本。其経註異文。從通行本而改之」と断定されたのは、倭宋の謗りを免れ難く、鼻眞の引倒しの感がある。桂庵は輯釈を特に重んじ、延徳本はもと／＼輯釈本系の近本を底本とすることはその学派の当然の帰結で、博士家の旧風に嫌き足らずして、異を唱えた所にこの学派の特色があつた筈である。

足利・吉沢両氏は、旧本を以て清原家に、近本は五山禅徒その他に行われたと漫然と概別されたが、伝存の諸本を総合的に考ふるに、この従来の分布分類説には疑なきを得ない。後記する足利学校本によつたという醍醐寺蔵中庸写本も旧本に属し、他の経書の伝存諸古写本の例に徴しても、当時僧俗を通じ経学界に君臨したのは清原家であり、中庸に於ても、一般に通用したテキストは、清原家の依つた旧本が大勢を支配し、近本は僅に西南の一辺陬に於てのみ行われたと見るのが自然である。日本の行われたのは清原家の權威というばかりでなく、当時渡来した唐刊本の部数は極めて僅かで、稀観中の稀観として一部に祕蔵されるに過ぎなかつた。典籍の普及は殆どが書写によらざるを得なかつたのであるから、古く鎌倉時代に早く伝来した先行の旧本が勢い因習の上からも転写を重ねて普及し易かつた事情も考慮に容れねばならない。

(ハ) その他

宮内庁書陵部蔵〔室町後期〕写大学輯釈・中庸輯釈二冊

元倪士毅撰。縹色表紙（二七×一九・五糎）。烏糸欄（一九・八×一五・七糎）有界九行各行廿字。注小字雙行。

眉上に横一線を引いて書層を作り、その幅四・五糎。朱点朱引、墨筆訓点が施してある。書眉・行間にはかなり書入が多い。

この本は元至正刊本に拠つた書写と思われるが、たゞ原本巻頭内題「大学朱子序」の前に、

大学章句序

積字為句積句為章積章為篇積篇為卷積卷為部也受教伝業曰学々者效也法也大学者大人之学也其經一章蓋孔子言而曾子述之其伝十章則曾子言而門人記之章明也總義包脉所以明情者也毛詩正義曰章句々必聯字而言句者局也聯字分彊所

以局言者也礼記学記曰玉不琢不成器人不知学不知道是故古之王者建国君民教学為先又曰雖有嘉肴弗食不知其旨也雖有至道弗学不知其善也是故学然後知不足教然後知困也

河南程氏兩夫子

伯子諱顓字伯淳号明道先生叔子諱頤字正叔号伊川

先生孟氏没而其伝焉混至二程夫子出而純学復伝於是始拔大学篇於大戴記之中尊信之又整頓其錯乱簡而發揮之但未成書耳

大学朱子序

毛伝云序者緒也則緒述其事使理相流統若繭之抽緒組易有序卦子夏作詩序孔氏作尚書序

後学新

安巢倪姓士 毅名輯釈 (訓点省略)

という如き原形には存しない注が挿入されている。この注の意味する内容は清原家に限らず、当時の経書の仮名抄には冒頭必ず述べられる常套的説明である。この追補は邦人の手になつたことは明瞭である。一部に本写本のような形の追記が輯釈に行われ、やがてその追補も士毅の注そのものと思われて転写されるに至つた。それは、前掲の陽明文庫蔵大学の朱序に附した輯釈がこの竄入本であり、また後掲の(二)本大学抄(東京教育大・国会図書館蔵)は、朱序には輯釈の注を「本注」と称して全載し、この竄入の部分がやはり「本注」の中に入つていことから推測される。家を厳守する博士家に於てはかゝるテキストの混乱は容易に行われようもないが、誦習が博士家のみならず、各層に普及するにつれ、漸次学習の便宜上かゝる現象の現れるのは、論語集解の各篇首にその篇旨を述べた皇侃義疏の文が竄入したテキストが清家本を除く室町後期の集解写本の大部分を占めるに至つているのと共通の理由に基づく結果である。此は甚だ些末の事柄のようではあるが、我が国の講書伝流の上からは決して看過できぬ一要因である。

本写本の首書・傍注は主として朱子或問や朱注の宋元末疏並に当時行われた字書類等からの抄録であつて、此等については後で再び論及することにする。この四書輯釈が上記の諸本の書入その他から我が国の学庸講書の上では極め

て重要な地位を占めていることは自から気づかれたことであろう。

四書輯釈大成とは、元の倪士毅（字は仲宏、生卒年未詳、新安の人、徽州の祁門山に隱居）の撰で、至元三年識した凡例に自ら語る所によれば、先師定宇陳先生諱櫟字壽翁は「四書發明」を編し、時に胡炳文も「四書通」を編した。櫟

は晩年發明を頗る更定せんと欲し、通を覩るに及んで、その説を摘録して自著に附入しようとしたが、未だ及ばず、士毅はその志を継いで二書を合して一に編したと。又、中庸或問の自跋によれば、至元三年三月に起稿し、同五年（一三三九）七月完成と。その後本書は至正三年（一三四二）夏、日新書堂より刊行された。朱子の卒後宋元の間に集註を敷衍補翼する末疏が多数著され、学者は却つてその泛濫に苦しみ、その取捨に迷つたので、頗る要領を得た本書は時宜を得た好著であつた。その後明の永樂帝が勅編せしめた「四書大全」は殆ど本書を剽窃して無批判に水増ししたにすぎぬことは、夙に日知録が摘抉して周知の通りである。以来大全が科挙の欽定注書の權威の下に代つて盛行して、本書は終に忘れられるに至つた。

本書が我が国に何時來されたかは明かでないが、義堂周信に將軍義満が孟子の疑義を尋ねた時、本書によつて説明したことが、その日録「空華日工集」の康曆三年（一三八一）十二月二日の条に見え、刊行後あまりへだてぬ南北朝末には傳來していたと思われる。我が国に於ては室町時代を通じて、本書は以下詳述するように、朱注講読の第一等の参考書として重ぜられた。輯釈の外に当時用いられた学庸の注釈書類は以下夫々の所で言及するが、こゝに室町時代に本邦に渡つたと推定され、特に当時の書入等を有するそれ等板本の現存本を調べて先ず参考に資してみたい。

宮内庁書陵部蔵元刊大学朱子或問・中庸朱子或問 各一卷 元倪士毅輯釈 二冊

淡香色地表紙（二四・五×一五・七釐）。雙辺（二二×一三・五釐）有界十三行各行廿四字注小字雙行。版心黒口。

四書輯釈に附刻されたものと思われ、至正三年日新堂刊の残本であろう。卷首に南禪寺の塔頭「金地院」の蔵印あり。大学の前半部にのみ室町期の筆の訓点を加えられてある。

宮内庁書陵部蔵元至元三年刊四書章句纂釈零本三冊

元程復心撰。廿二卷中存総要三卷。元至元三年（一三三七）九月富沙碧湾呉氏徳新書堂刊。各卷末に「国賢」（清原国賢）、中・下巻の卷首に「東」、各卷首に「佐伯侯毛利高標字培松蔵書画之印」の蔵印あり。第一・三冊の卷末に朱筆による左の奥書を有する。

(一) 天文九年庚子秋七月二十一日乾三叟守稜漫加朱

(三) 天文九年庚子秋七月二十二日乾三叟守稜漫加朱（花押）「この花押は朱筆で塗抹してあつて判読不能」

且つ第三冊にはこの奥書の前に墨筆で以て「大博士清原朝臣良雄（花押）」の清原業賢（宣賢の長男、良雄は天文十八年一説十二年の改名）の自署が辛うじて判読できる。

「図書寮漢籍善本解題」「図書寮典籍解題 漢籍篇」は天文九年識語の乾三叟守稜を、この識語の次行に捺してある「国賢」の朱印につられたのか、清原国賢（業賢の孫）となしているが、国賢は天文十三年の誕生であるから、この本の伝承者であつても、その識語者ではない。乾三叟守稜の何人なるかは不明。

この本は全巻に亘つて朱点朱引、所々朱筆で訓点を加えてあるのは、天文九年のそれであろう。清原家伝来本であつて、この章句纂釈は後述のように宣賢抄を始め清原家の抄本には時々引用されておる。

宮内庁書陵部蔵元至元三年刊四書章句纂釈零本二冊

前者と同板ではあるがかなり後刷。総要三巻大学中庸句問纂釈各一卷を存し、大学中庸の章句の部分は我が国の古

活字本を以て補つてある。第二冊裏表紙の見返しに、「惺窩先生門人 堀正意字敏夫号杏庵所持本也」の墨書、第一冊の巻首に「平安堀氏時習齋藏」、その他寺田望南の蔵印を有する。第二冊の終りに次の朱筆の奥書がある。

応永二十歳次癸巳夏五月初一在不二北軒下点

文明七年乙未六月／朔重写点畢

第一冊は後半所々に朱筆訓点ある外は、全巻に朱筆句点のみ、第二冊の補配の古活字本学庸経文朱注には清家点によるヲト点訓点が増えられてある。この文明七年加 points の祖となつた応永二十年の加 points 者は「在不二北軒下点」とある所から推測するに、恐らくは四書集註の公開講義、その新法和 points の嚆矢をなして著名な東福寺の不二道人岐陽方秀（応永卅一年東福寺不二庵に寂す）ではあるまいか。

この章図纂積は朱注に特に黄・輔両氏の説を折衷して、章を分ち、その要綱を図示したものである。岐陽には「学庸科文」一卷の著ありと伝えられるが、今亡失して見ることを得ない。題名から察するに、仏典の科を分つ法に倣つて、学庸の経文を段節に分つて、その脉絡関係を系示したものであつたのであろう。従つて本書はその重要な参考書であつたと思われる。岐陽の高弟雲慶一章が百丈清規を講義し、それを桃源が筆録した「雲桃抄」（建仁寺両足院・足利学校・慶応義塾図書館等蔵）の住持章の中には、大学の三綱領八条目を図解して説明してあるが、その図式は本書のそれと形式が類似してゐる。ちなみに、この「雲桃抄」の中で、雲章は学庸を引くことが多く、宋学の性心の工夫を禅と関聯して解き、朱子学に対する深い理解と情熱を見せてゐる。

中庸の古鈔本には、鎌倉、南北朝、室町と夫々の時代の写本が遺つていたので、その推移をかなりよく考察することができらる。

(1) 東洋文庫蔵伝正治二年奥書鎌倉写本

東洋文庫蔵〔鎌倉〕写本二軸

錦表紙、高さ二七・八糎。金色絹題簽を貼り、「中庸上(下)巻」と題す。裏打補修を加う。見返しは金砂子ちらし。烏糸欄を施け、界高二・八、界幅三糎。毎行十五字内外。注文低一字。音注伝注小字雙行。全巻にほゞ本文と同時頃の筆になる朱筆ヲコト点・句点、墨筆訓点四声点を加えること精密。返点は「レ」点と「一・二」点で、「上・下」点の使用は殆ど稀れである。但し上巻の加点はほゞ筆蹟二手、一手はやゝ後の如く見え、また間々行間(殆ど経文)に「經典釈文」によつたと思われる音注を書入し、眉上に旧注の音釈を引く首書二条がある。

上巻は序に始つて、十九章に止り、第一章「道也者不可須臾離也」以上と以下と筆者を異にし、巻首に「文章博士兼紀伊権守藤原朝臣敦任」と書せる附箋を貼附する。下巻は上巻の書写二手とは異筆で、廿四章より尾に至り、「補音釈」四条を附記し、「中庸章句畢」と題す。巻初に、上巻の附箋と同筆の「文章博士兼能登権守藤原朝臣敦佐」と記せる附箋を貼る。巻末に本文より数行を距て、本文とは別筆で、

正治二年三月四日 大江宗光

の奥書あり、更に二行をへだて、異紙を糊継ぎして、その継目にかけて南北朝頃の筆で

五月三日 眞性(花押)／埜越中殿

なる伝授識語が記してある。

云爾淳熙己酉春三月戊申新安

朱熹序

中庸

中庸不偏不倚無過不及之名庸平常也

朱熹章句

子程子曰不偏之謂中不易之謂

庸中者天下之正道庸者天下

之定理此庸乃孔門傳授心法子思

恐其久而差也故筆之于書以授

孟子其書始書一理中散為萬事

未復合為一理教之則彌六合卷之

則遠藏於密其味無窮皆實學

也吾讀若死索而有得吾則終身

用之有不能盡者矣

天象之謂法象性之謂道體道之謂義

東洋文庫藏鎌倉写本中庸章句

写本は正治二年（一一二〇年、朱子没年に当る）写本と称され、本邦宋学伝流の最古を示す年記として、諸氏の論考に引用されて著名である。足利衍述氏等の考証によれば、附箋に見える敦任・敦佐は藤原宇合の後、式家の学者で、兩人は叔姪の間柄にある。奥書の完光は大江広元の三男。奥書と附箋の関係は種々の推測を容れる余地があるが、足利氏は次の如く推定した。

先づ其筆写年代を考ふるに（中略）正治の写と見るを妥当とせん。想ふに、敦任は敦佐の叔父にして、藤原頼長の經史談義に参し、清原頼業等と共に講習討論せし人なれば（台記）頼長・頼業二卿の中庸崇信に感鳴し、宋商又は入宋僧に托して、宋儒の中庸解を注文せしかば、宋商又は入宋僧（建久二年（榮西より）は、当時宋国第一の碩儒朱子の中庸章句が成れるより、直に之を將來したるものならん。而して敦任は之に加点了たるも、八十の老齡故、上卷のみにて終り、下卷は敦佐が加点了たるには非るか。それを、宗光が借りて、人をして写さしめたるに非るか。宗光の父広元は、幼にして明經博士中原広季（一作）に養はれて其子となり、後本姓大江に復歸せるも

の。広季は敦任・頼業と同じく、頼長の經史談議に参せし同学の間柄なれば(台記参照)、宗光と敦任・敦佐との間に關係ありしは言ふを要せざるべし。

淳熙十六年三月、朱子中庸章句成りて後、数年ならずして我国に伝來し、訓点まで加へられたるものは、我儒教史上に特記すべきことなり。然らば此を以て朱子学伝來の期となすべきかと言ふに、余は之に対して聊か踟躕するものなり。何となれば、此は単に朱子の著述中の一なる中庸章句なる一書籍が伝來されたる迄にて、学問其ものが伝來されたるに非ざればなり……（「鎌倉室町時代之儒教」二八一—二九頁、以下足利氏の引用は全て同書よりのそれ。以下書名を省略す。）

併しながら、吉沢義則博士等の如く、この奥書附箋を疑う一説も存する。今此等を再検討するに、正治二年の奥書は、墨色が本文と遙かに異つて、紙にのつておらず、筆蹟も鎌倉のそれに似ず、遙か後世の追記たるものがある。この附箋の筆蹟紙質とも江戸後期のそれで、古筆家のなせる業で、為に謀つた妄補である。従つてそれ等は何等信憑に値するものではない。併し真性の伝授識語は南北朝頃の筆蹟と見て妥当である。清原良兼（延文六年歿、年四十八）の法名は真性であるが、此とその花押が合わないから、こゝの真性は別人で、何人なるか明かでない。以上の如く正治二年の奥書は信じ得ないが、本写本は鎌倉末を降らざる書写にかゝることは疑なく、巻初首行下端五字を破損する外は首尾完好、洵に希世の宝典である。

本写本のテキストは先に言つた旧本に属し、末記の「補音釈」は本邦中庸古写本のいずれも附する所で、宋元版に附刻されているもので、「呂亭知見伝本書目」は「蓋宋元間翻刻所加」と云う。本写本は当時將來された宋元版、淳祐本の如き大字本をその体式に倣つて写したものであることは疑ない。全巻に見られるヲット点返点送仮名は詳細に

附されてあつて、そのヲト点は明経点に属する。併し此が何れの博士家の家本であるかは詳かでない。清原家の講義の抄物に「所以」という字を清家では「ユヘン」と読み、中原家では「ユヘ」と読むという読み癖が述べられておる。本写本の「所以」の字の大部分には振仮名がないが、往々附してある所も存し、それには全て「ユヘ」と仮名がついておる。清原家本に属する古文孝経の鎌倉写本の中で「所以」の字に稀に附してある仮名には「ユヘン」とある。この点から、この本の点は或は中原家点ではないかと想像できるが、勿論この一事のみを以て断定はでき難い。

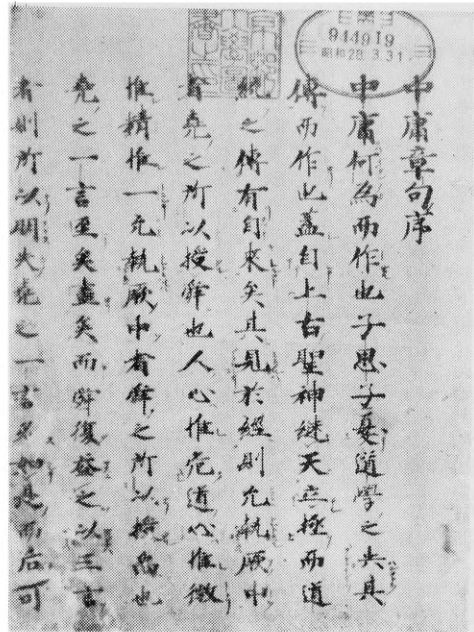
この本の訓点を次掲の弘和二年本、清原宣賢本のそれ等と比較すると、三本の間には、音韻・表記法の時代の変遷に基く相違を除いて、送り仮名に多少の差異は認められるが、大体に於て大差がない。この訓点は大学と同様札記の古点を踏襲して、朱註に合せたものである。一部には、朱註の解義と抵触する訓も異訓として残して併記する箇所もある。本写本から察すると、朱註本の学庸の訓点は鎌倉後期にはほど完備した形で固定し、それが博士家点として中期を通じて伝承されたことが認定できることは、我が国の儒学史に極めて注目すべきである。

(四) 弘和二年本

京都大学附属図書館（清原文庫）蔵弘和二年奥書〔室町初〕写本一冊

本文共紙表紙（二六・七×二〇・八糎）。表紙左肩に「中庸」と題書。紙紐による大和綴。裏打補修を加ふ。四二丁。字面高さ約廿一糎。毎半葉八行各行十六字注小字雙行。朱筆のヲト点朱点朱引、墨筆の訓点（返点の一部朱筆）を丁寧に加えてある。但し十八章以下は朱注にはヲト点訓点がなく、経文の点も前半に比し簡略になつてゐる。尾題の次に補音積四条を附記し、次葉に左の奥書を有する。

時也弘和第二之候晩春下旬之天於大和国宇智郡／榮山寺 行宮為末学後要染筆訖／隠士禅恵（花押）



京都大学附属図書館蔵弘和二年本中庸章句

本写本は弘和二年の書写にかゝると見るには一抹の不安を残し、少しく降つた移写本の如く思われる節がある。この弘和二年の奥書は、栄山寺に長慶天皇の行在所が置かれた事実を示し、また南風競わず艱難流離の間にも吉野の廷臣が新学の講誦に孜孜たる好学の状を欽慕せしめる徴文として著名である。この奥書を記した禅恵の伝は明かでないが、隠士とあれば出家後の廷臣であろう。順徳天皇の曾孫忠房親王の法号も禅恵一作慧であるが正平二年薨ぜられ、南朝と縁故の深い金剛寺の僧禅恵とも年代が合わない。

天授五・六年に同じ栄山寺行在所に於て書写した旨の奥書を有する書陵部蔵孟子集註一四卷七冊と一系の関聯の繋がつていることを推知せしめる。書陵部蔵本は、「圖書寮典籍解題」を始め諸書の引用に、天授書写と録されてあるが、実は遙か時代の降つた室町後期の移写にかゝる。その奥書は諸書に重要な箇所を脱落して紹介されているから、その全文を左に録して、それ等と併せ照合して、この弘和本中庸を考察することしよう。

(第一冊卷二末) 依履之坦上人懇命分句読誌音訓畢／時天授戊午孟穰晦也／芸巢賸人／弘和元年孟夏上旬移花山院

右大将／点了(第一冊末)天授第五曆林鐘十二日於和州／栄山旅宿以唐本書写之訖／以同本校合了

(二冊末) 天授五年無射上旬於榮山之旅／宿書寫之畢以唐本一校了

弘和元年薺廬中二日移花山院右大将点了／本云天授戊午禊季穠上澣分句詭畢芸菓子

(三末) 天授五年無射下旬於榮山旧館／書寫了／以唐本校了

(四末) 天授五年無射中旬於榮山行宮／書寫之訖／以仲盛卿自筆本一校了／以唐本校了

(五末) 天授五年応鐘上幹日於榮山行在所／書寫之訖

(六末) 天授六年孟春初五日於榮山旅館／書寫之了／以同本一校了

(七末) 天授六年正月十日終一部書寫之／功畢／以同本一校了／不可有外見者也

以上のようにこの孟子集註はその奥書によれば、天授五年六月から同六年正月にかけて、大和榮山の行在所に於て、唐本を以て書寫し且つ同本によつて校合(第四冊は仲盛卿伝不明、新葉集に参自筆本をも校合)を終え、更に弘和元

年夏花山院右大将の点をも移寫したと云うのである。本云天授戊午芸菓子議仲盛とある人かの奥書は恐らく花山院右大将の点本にあつた奥書で、花山院右大将(即ち芸菓子カ)が天授四年坦上人の懇命によつて加点了ものと考えられる。

この花山院右大将とは誰であろうか。それは弘和元年右近衛大将に陞つた花山院長親であらねばならぬ。長親は後醍醐天皇側近の忠臣花山院師賢の孫、内大臣家賢の子、正平初年吉野の行在所に生れ、字は子晉、号は耕雲一作、法、

号は明魏。幼時より父と共に後村上天皇に仕え、殊に長慶天皇の御信任が厚く、内大臣に昇進し南朝の柱石であつたが、南北朝合体と同時に、素願の如く落飾して節を二つにしなかつた。学は和漢を兼ね、歌は宗良親王の流を汲み世に出でず韜晦したが、晩年の応永年間、耕雲明魏公の声名は歌壇の重鎮、一世の碩学と仰がれた。正長の初め八十有余にして遠江に下り終りを知らない。祖父師賢は若きよりの玄恵法師の門に学び、後醍醐天皇の所謂の新学派の錚

錚たる廷臣、この家学を継ぎ、壮歳中納言にして文章博士と准儒を兼ねた長親が、孟子集註に加点したことは洵にふさわしい。中世期の代表的歌論たるその著「耕雲口伝」は朱子性理の学と仏教の人生観を渾融した素養の上に組織されておる。長親は儒学に関して著書を残していない。併しながら、「予比者、同住山中。間得剽聞緒言。姫孔之籍。莊列之言。及乎漢唐一史上下数千載事。質其疑義。徵其異聞。如鼓侍桴。如矢中的。益扣而益不_レ尽。」

(某禅師作「耕雲老人寿像贊」)と評された耕雲は、当時儒に於ても時流を抜いていたことは想像に難くない。

この中庸の写本には点者を記さないが、天授本孟子との関聯に於て、彼此考え合わすならば、この弘和本中庸の元加点者を花山院長親に擬しても決して荒唐無稽の一妄想と一概に一蹴し得ぬであらう。勿論この本は隠士禅恵が当時の点本によらず、鎌倉以来の伝本を襲伝書写したということも大にあり得ることである。併し、中庸朱序の「子思子憂道学之失其伝而作也」の句を、博士家点のいづれもが「其の伝を失はんことを憂へて」と訓むのに対し、本点は、「其の伝の失つてんことを憂へて」と訓む如きは、吉野朝期の語法を思わしめるものがある。当時吉野の朝廷に於つて四書に加点をなし得る公卿は長親を措いて考えられない。長親が全く新に点を附したわけではなく、前掲の鎌倉写本が現存する如く、鎌倉以来、特に文慧等の先行の点に依つたことは勿論である。本写本のテキストは旧本に属し、ヲコト点は明経点で、その訓点は送り仮名に於ては、前掲鎌倉写本や後掲清家本ともやゝ異つた所が僅か存する。

(ハ) 清原家本

現存の清家証本中庸は清原宣賢加点本より溯り得るものは発見されず、以下解題する諸本は宣賢後のものも含めていづれも宣賢点系で、それ等は転写の各過程に於ける変移の故もあるが、振り仮名送り仮名等に於ては、その間に自ら僅少の出入詳略の差異が生ずるのは免れぬ程度で、同一本と称してよい。



京都大学附属図書館蔵清原宣賢手写手点本中庸

京都大学附属図書館蔵清原宣賢手写手点单経
本一冊

空色表紙（二六・八×二〇・四糎）。烏糸欄（二四×一八糎）有界七行各行十五字。表紙の貼題簽に宣賢とは別筆で「中庸章句」と題す。廿八丁。全巻に朱筆ヲコト点、墨筆の訓点を附すること極めて精密で、清濁の別を丁寧に傍記してある。首に「船橋藏書」印あり。巻末奥書に、

僧俗学徒、関東学士、十三経訓点清濁、悉背先儒之説／且失師家之伝、悲哉、予憐子孫赴邪路、一字不闕点之、亦／清濁字声指之、为令読易、不依

仮名使是亦一之術也、可／深祕而已

侍従三位清原朝臣（花押）
俗名、宣賢、法名宗元
号環翠軒

此とほゞ同趣旨の奥書は京大蔵宣賢手写手点論語单経本にも存する。本写本は朱序経文のみで、朱注はない。

京都大学附属図書館蔵永正八年清原宣賢加點奥書（近世初）写本一冊

香色表紙（二六×二〇・七糎）。表紙左肩の貼題簽に「中庸 全」と題書。巻首に「天師明経儒」、首尾に「宣条」の印あり。伏原家旧蔵本。字面高さ約廿一糎。每半葉八行各行十五字注小字雙行。朱筆ヲコト点墨筆訓点、行間に間々音注を記入。尾に補音釈を附す。四二丁。巻末奥書に、

永正八年六月廿日以唐本遂書写之功同加朱墨訖／加点以証本校合了／少納言清原朝臣在判

宣賢 大内被官 南禪寺林首座 享祿三 於能州
飯田將監発起 一 発起大永五 一 畠山左衛門佐義総亭

一 於禁中講九ヶ度
天文十四十一十三始廿九終

一 於親王御方講 一 於越前国一乘谷講天文十五正廿七始之
天文十四十一始廿八終 二月八日終九ヶ度

一 於越州一乘谷安養寺講天文十七
三十一始之五月十九日終九ヶ度

枝賢 一 弘治二月於撰州芥川城
松永彈正忠久秀発起

この本の元本たる宣賢自筆本は未だ発見されない。本点本は前掲の宣賢の永正十一年手写手点本と対をなすものである。又、この本は上に紹介した同じ伏原家旧蔵京大図書館蔵の文亀三年清原宗賢永正二年小槻宿禰奥書本の近世初写本と、筆跡を異にするが、対をなす証本で、彼と同様に此にも宣条が追記した訓点書入を存する。

天理図書館蔵同上奥書〔近世初〕写本一冊

改装。後補砥粉色覆表紙。丁子色元表紙（二七・五×二一糎）。表紙左肩に卜部良芳の筆で「宣賢卿御筆中庸」と題書。料紙薄葉、裏打あり。首に「宝玲文庫」印あり。五四丁。字面高さ約二〇・五糎。每半葉七行各行十四字注小字雙行。初二葉のみ朱筆ヲト点を附するが、他は墨訓点のみ。末に宣賢の筆跡を摹写したと思われる前掲本と同様の永正八年奥書・講義識語を有し、次に修理の際の左の識語が存する。

宣賢卿御真筆也／加修補畢／弘化四年丁歳十一月十六日／従三位侍従卜部良芳

吉田良芳は宣賢自筆と題するが、移写本である。

東京大学国語研究室蔵同上奥書吉田兼右書写本一冊

改装。裏打補修が加えてある。新補丹覆表紙(二七・五×二一・五糎)。その左肩に卜部良芳の筆で「兼右卿御十三歳御筆／中庸」と題書。茶褐色元表紙。それには「中庸」と墨書。五三丁。烏糸欄(二〇・七×一七・三糎)有界七行各行十四字注小字雙行。朱点朱引朱筆ヲト点、墨訓点を加えてある。卷末奥書の前半は永正八年の前記と同文の奥書で、同文の講義識語も記すが、この講義識語から以下は本文の若書と異つた兼右の後年の筆跡にかゝる追記で、次の通り、

此本予十三歳而書写了

此本予十三歳而書写之処環翠先生令加朱点給歴数年矣／今雖可書改之先加墨点了

天文十九年十月廿二日 左兵衛卜部朝臣(花押)

右一冊兼右卿／御筆也加証明訖／兼雄

後表紙に弘化四年補修を加えた時の卜部良芳の識語が誌してある。この本は、吉田(卜部)兼右が十三歳の時、宣賢の永正点本を写し、それに宣賢が朱点を加えてやり、後に兼右が更に墨筆の訓点を移写したものである。兼右は宣賢の男業賢の弟であるが、父の実家吉田家を継ぎ、清原家本を書写した遺品が多い。

国立国会図書館蔵元和四年梵舞書写本一冊

縹色表紙(二七×二〇糎)。表紙の左肩の貼題簽に白ぬきにて「中庸」と題書。烏糸欄(二六×一七・四糎)有界七行各行十四字注小字雙行。朱筆ヲト点朱点朱引墨筆訓点を附し、行間に音注が書入れてある。五四丁。奥書は、

「写本云」として前掲東大國語研究室蔵吉田兼右書写本の永正八年の宣賢・天文十九年の兼右の奥書をそのまま移写し、次に博士家の点図をかゝげ、次葉に、

右如此之御奥書也尤証本子雖及老眼書写／并遂朱墨両点校合以下之功者也勿他見許矣／

元和四 戊 午 六月十日 神庵院

六十六歳

梵舜(花押)

五廿六筆立六十一書終了

という梵舜の書写奥書がある。即ち吉田家所蔵の前掲の兼右本を忠実に移写したものである。

内藤湖南博士旧蔵武田長兵衛氏現蔵に「永禄十一年二月六日 梵舜(花押)」の奥書のある中庸写本一冊があり、未見であるが、「恭仁山莊善本書影」に収めたる首尾二葉の書影から察するに、訓点等はこの国立国会図書館蔵元和四年梵舜書写本と同じようである。

京都大学附属図書館(清原文庫)蔵清原枝賢天正元年奥書〔室町末〕写本一冊

朱表紙(二五×一七・五糎)。綴葉装。料紙厚手斐紙。五四丁。両面書。字面高さ約廿一糎。每半葉七行各行十四字注小字雙行。ヨット点はなく、朱点朱引、墨筆訓点を附す。本文は枝賢(業賢の男、宣賢の孫)の筆ではないが、その自筆の奥書に曰く、

右中庸者儒術之徳業聖門之／奥室也喜怒哀楽仁義礼知之要／也于爰祐円律師日々々習而誦／読之嗚呼助於我乎

天正元年冬十又二月中旬

宮内卿清原朝臣〔枝賢〕の朱印の上に花押を据える

仁和寺蔵永禄八年書写单経本(清原枝賢点本)一冊

栗皮表紙（二二×一五・三糎）。表紙見返しに「仁和寺」の蔵印並に墨書あり。字面高さ約一八糎。每半葉八行各行十六字。墨筆で訓点を加えてある。書写奥書に曰く、

右中庸全部以 宮内卿清原枝賢自筆家点

書写之尤為祕本者也

永祿八丑臘八誌之 仁和寺（花押）

成實堂文庫には中庸章句の室町末写本二部を蔵し、同文庫善本書目によれば、一は前掲の同文庫蔵大学の僚巻で天正元年清原枝賢の奥書を有すとあれば、前掲京大蔵枝賢奥書と一致する如く見え、此はその移写本であるまいか。他は「家康等の帰依せる雲如和尚が手写せるものと伝ふ。訓点並に乎古止点は清家祕点なり。」と。

陽明文庫蔵〔室町末近世初〕写单経本一冊

濃縹色表紙（二七×二一糎）。字面高さ約二三糎。每半葉九行各行十六字伝注小字雙行。ヲコト点はなく、墨訓点のみ。廿一丁。

古活字本中庸章句は大学と同様清家本を翻印したもので、次の現存伝本の殆どが清家点を移写してある。

慶長四年刊勅版单経本（陽明文庫蔵）

今関正運刊第一種本（東洋文庫・天理図書館・武田長兵衛氏蔵）

同第二種本（高木文庫旧蔵）

同第三種本（大東急記念文庫蔵）

下村生蔵刊本（慶応義塾図書館・東洋文庫蔵）

清原家が中庸を誦読したのは何時に始まるかは明かでないが、大学と同じくかなり古いらしく、良賢・業忠の頃になると盛に講義を開いている。伝存の清家本は宣賢加重点のみであるが、他の経書に於けると同様、本書に於ても宣賢は累代の家本を殆ど踏襲したと思われる。宣賢点が前掲の鎌倉写本・弘和二年本の点と大同小異である所から見れば、最初の加重点者が清原家か中原家か他の博士家かは別として、とも角鎌倉期に成立した点に依拠しておる。更に溯れば、中庸も大学と同様、礼記の清家点に基づいておる。宣賢は後掲の中庸抄の中で、従来の家点を古点と呼び、その改訂点を新点と称して、古点の不備の箇所を少し指適しておること、大学の箇所で既述した通りである。併しこの新点の定義が、古点を訂正した宣賢の新点を指すのか、例えば岐陽等の系統が博士家点とは別に立てた点を意味するのかわ昧である。

例をあげれば、第一章の朱注「性道雖同、而氣稟或異」の訓点につき、「性道トシタカ古点ソ、近注ニ性ト道トヲ二ニシタソ」（京大蔵天文廿二年写中庸抄）と即ち「性道雖同」というのが古点で、此は「性・道雖同」と点せよと言っているのである。鎌倉写本・弘治本は前者で、永正八年の宣賢点は後者の如く点が附してある。朱注のこの文に続いて「聖人、因人物之所当行者而品節、以為法於天下云々」の点を、「以為法於天下ニ古点チャカ、是ハ悪イソ、古点ノ誤リチャソ、以為法天下ニカ吉ソ」（同上）と。併し宣賢点も古点の通りで改めてない。第廿章経文「忠信重禄、所以勸士也」注文「忠信、謂待之誠而養之厚」を古点が「士に」「忠信アルトキンハ」と訓ずるのを、「君に」「忠信アツテ」と改むべきだと、「忠信アルトキハ、古点非歟」（宣賢著「中庸抄」）「待トハ上タル人ノ忠信有方ソ、忠信有重禄ラ点可也」（京大蔵天文写本中庸抄）と言っておる。その理由を烏有子撰「中庸章句童子訓」は更に

詳しく、

忠信ノ点ハ、家ノ古点ソ、新注ノ心ハ、或問ニ、忠信重禄ト見エタ、君ノ心ニ忠モ信モマコトアツテ、禄重レハ、土カス、ムソ、信カ、ナケレハ、忠賞セラルレトモ、用ニタ、ヌソ、タ、シ、古点ヲ本トス

と述べる。鎌倉写本・弘和本・宣賢手写点本は経注とも古点の通りで、たゞ永正宣賢点の伏原宣条旧藏本は経文の方のみ「忠信アルトキンハ」「忠信アツテ」の二訓を左右に記すが、宣条は前者に「可从」の書入をなしておる。また第三十三章の「不大声以色」（注文は「不大声与色」）に関し、「不大声以色、古点ハ不大声以色ト、以ノ字ヲ与ノ字ノ心ニヨムソ、以ト与ト通スルソ、マタ声色ノ上ヲ不離ソ」（京大藏天文写中庸抄）と言つてゐる。但し、鎌倉写本・弘和本・宣賢点本いずれも新点の如く、「色ヲ大ニシ色ヲ以テセズ」に訓んでおり、そう訓むのが古点のようで、中庸抄の「古点」の二字は諸本ともそうなつてゐるが、「新点」の訛であるまいか。朱注は以と与と通用と見ることがあるから、朱注によれば「声ト色トヲ」と訓すべきである。

宣賢はその抄の中で往々「近注ニヨレバ」ということを言つてゐる。この「近注」とは朱注に対し、四書輯釈等の宋元の朱注の末疏を指し、新点を提起する場合も近注によれば等と述べる場合がある。所謂の旧点は近注がまださ程渡来しなかつた以前の訓点であつて、その後近注を広く参照して朱注を精読再吟味した結果、旧点の不備を改訂したのが所謂の新点のようである。併し此は果して宣賢のみの業であらうか。清家点本以外の学庸の古写本は殆ど伝わらないので、明確な推測は遠慮せねばならぬが、清家以外の僅な写本類を見ても、その訓読は宣賢が指摘した新点にはほぼ従つてゐる所から見れば、旧来の博士家点の不備をついたのは、却つて岐陽方秀等の五山僧系統の外典講説家達であるまいかという気がする。力量のある宣賢のことであるから、自身ももとより力めた所も多いと思われるが、岐陽等

の博士家外からの刺戟影響も多分に与つて力あるものと見るべきであらう。宣賢の性格は鋭い独創力を有するというよりは、包容力に富み、凡ゆる説を自家棄籠中の物と化して、集大成することに非凡な器量を有しておる。

以上の如く宣賢は従来の家点を改めており、朱注の意に即せば、改点の方が妥当である。併し、現存の宣賢点本を見ると実際は所謂る古点の通りで、殆ど所謂る新点に改めてない所を見ると、それは講義等では言及しても、正式の清家証本としては漫に変更を行わず、家の古点を本として伝襲したのであらう。

(二) 足利本

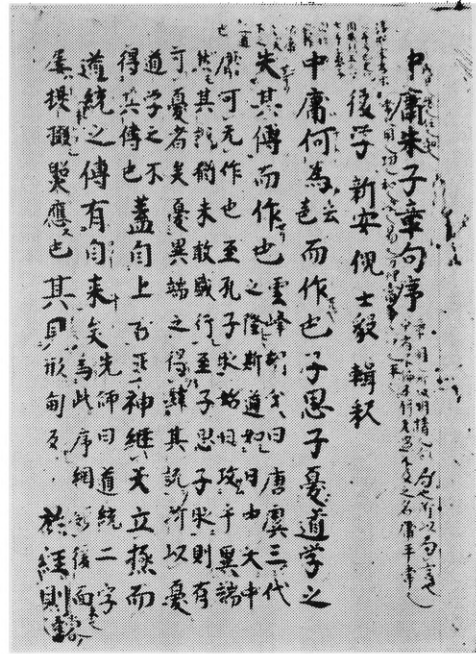
醍醐寺藏明応二年写本一冊

空色表紙(二五・五×一七・五糎)。字面高さ約二一・五糎。每半葉八行各行十五字注小字雙行。所々朱引を施し、全巻に墨筆の訓点をかなり丁寧に下してあり、所々首書傍注の書入がある。五五丁。虫蝕が甚しい。巻末書写奥書に

明応二年巳孟秋廿八自下州足利出来本写之(明応二年は巳に非ずして丑、誤記か)

「自下州足利出来本」と言へば、足利学校の本、もしくは学校で写した本の意味で、本写本が足利学校使用本の系統であることは明かである。足利学校に於て、学庸が講読されることは、当時の学風から考えて、ごく自然の成り行きであるが、従来その事蹟を示す文献上の確証もなく、足利学校本の学庸と目すべき伝本は何等発見されなかつた。その意味に於て、それが醍醐寺の経蔵の筐底に秘められたまゝであつたのが、今回新に紹介することができることは足利学校の教化の分布交渉の考察上からも、極めて興味が深い。

この本は、一冊であるが、十九章までを上巻以下を下巻とする二巻に分けられ、倪士毅の輯釈を雙行に挿入した朱序を巻初にかゝげ、次にもう一度朱序から始まつて尾に至つておる。上記の大学の朱序に輯釈を附したと同じ類型で



中庸章句 本中寫本二年明應寺藏醍醐

のであろうか。これは足利学校の講義が図書に乏しい田舎で行われ、また教育の實際上の必要に迫られ、博士家のそれとはやゝ異つた風姿を帯び、同校の学風の特色を推測せしめるものがある。

本写本はテキスト上は旧本に属し、その訓点は博士家点に由来し、その影響を受けていることは明かだ、清家点と比べるとかなり似ているが、また一面送り仮名は相当に異なる所が見られる。宣賢が古点と新点の相異として指摘した箇所の如きは、概ね新点の訓になつてゐる。傍注の書入は間々仏意も混えた簡単な字義の説明と、「士曰」として倪士毅の四書輯釈からの引用である。この書入が果して足利学校本そのものに由来存していた旧形か、或はその移写者が新に記入したのか、問題がある。併し、現在遺つてゐる足利学校本の殆どには、諸注を補入書き入れてあるのが普

ある。こゝに聯想されるのは、既に一言した孝経直解（古文孝経の孔序に劉炫の述義を節録附記せる）皇侃の義疏を竄入せしめたる論語集解、また論語発題（邦人の撰と思われる論語の解題書、その考証は別に詳述の予定）を合綴せる論語集解が足利学校本の中に見出されることである。現在でも往々学校の教科書には簡単な注や解説を附した本が採用される如く、足利学校に於ても、かゝる簡便な注解附きの本が教科書として使用され、この講義と学習上の便利の目的から、やゝ変形のテキストが成立したも

通である。従つて或る程度祖本に既にあつた書入であろうか。以上の所から見ても、足利学校に於ても、学庸章句に對し最も参照された疏は四書輯釈大成であつたと考えてよからう。

三 邦人選述大学注釈書類

学庸に対する講書の行われたことは早くは鎌倉末南北朝頃の文献に見え、応永以後は公卿禪僧の日乘等にかなり散見するようになる。併しそれ等の聞書の類が成立したか否かは明かでなく、遺品も現在伝わつておらず、邦人のものした注釈書の現存本としては一条兼良の四書童子訓を以て権輿とする。その後の現存本は殆どが清原宣賢の抄物を中心とする清原家の講説本である。

(1) 一条兼良撰四書童子訓

慶応義塾図書館蔵〔室町末〕写本一冊

鳥の子無地淡茶褐色表紙(二六・四×二〇・四厘)。題簽の剥脱した跡がある表紙左肩に「四書童子訓 大学」と、また下小口に「大学抄 全」と墨書。本文六一丁、遊び紙二丁。内題に「四書童子訓卷之一 大学」と。尾題なし。本文片仮名交り楷書。字面高さ約廿二厘。每半葉一四行各行字数不等約卅字内外。全卷朱点朱引を施し、経文並に朱子序には、墨筆の訓点を下し、且つ朱筆でヲト点を加えてある。このヲト点は明経点で、かなり丁寧に加えてある箇所と殆ど省略してある所もある。この訓点は清原宣賢の点に比べると、少異はあるが、概ね一致する。卷末の遊び紙に、道学統宗之図及び朱子の生歿年等が記してある。故橋本准吉博士旧蔵。本文末に次の奥書あり。

本云／後成恩寺御作也可祕々々／清原宣賢

後成恩寺は兼良の号。この本の書写は室町末にかゝり、少くも慶長を下らず、筆風や、宣賢や清原家・吉田家の人のそれに通ずるものがあるのは、宣賢手写本からの直接の写しか、清家乃至はその親近者の書写になつたことを証し得よう。

京都大学附属図書館（清原文庫）蔵〔室町〕写本一冊

茶褐色表紙（二五×二〇糎）。大和綴。外題なし。内題、「四書童子訓卷之一 大学」。字面高さ約二二・五糎。每半葉十五行各行字数不等。全文朱点朱引を加え、経文には訓点がない。全四五丁。卷末の遊び紙に「言継」の朱印がある。宣賢の門人山科言継（天正七年薨）の手沢本で、書写年代もその当時と見なしてよいが、言継の手写か否かは不明である。

陽明文庫蔵〔室町後期〕写本一冊

淡褐色打曇表紙（二七・八×二一・三糎）。外題「大学抄」。内題「四書童子訓卷之一 大学」。尾題「四書童子訓卷之一」。字面高さ約二三糎。每半葉十三行各行字数不等。朱点朱引を施し、経文には朱筆を以て訓点を加えてある。少しく後人の書入になる頭注を存する。「陽明蔵」の朱印あり。

大和文華館蔵寛永元年写本一冊

栗皮表紙（二七×二〇・五糎）。包背装。外題「大学」。内題「四書童子訓卷之一 大学私」。尾題「大学抄全終」。字面高さ約二五糎。每半葉十三行各行字数不等。朱点朱引を施す。全六一丁。首に「尙綱舎蔵」の朱印、即ち吉田神社祠官鈴鹿家旧蔵本。尾題の次に左の書写奥書あり、

文亀元年六月十三日書写矣／右兵衛督卜部兼右了

此一巻寛永元年親月廿三日書記之吉田萩原殿ノ祕本タリトイヘ／トモ種々以大望書写訖ノ湯浅五郎兵衛（花押）

東京教育大学附属図書館蔵〔江戸前期〕写本一冊

無地淡香色古表紙（二六×二〇糎）。外題「童子訓 一条禅閣御抄」。元表紙であつたと思われる本文共紙の扉に

は「童子訓」と墨記。每半葉十四行各行字数不等。字面高さ約廿三糎。全巻に朱点、経文には訓点を加えられ、本文

五三丁。巻首に「北総林氏蔵」の朱印、故林泰輔博士旧蔵本。寛永頃の書写で、尾に左の奥書あり、

御本云

後日校合之後参差事繁多猶加清撰可令書直也

御本云一条太閤

此一冊殿下御抄也文安元年仲秋下旬之此詔或人加筆書写之御勘文畢 御判

なお後表紙の見返しに貼附した押紙には林博士の字で、「京都吉田家ノ本ニハ左ノ奥書アリ……」として、前掲の鈴鹿家旧蔵本の文亀二年云々以下の奥書全文が写されてある。

家蔵〔江戸前期〕写本一冊

本文共紙表紙（二六×二二糎）。外題なし。内題「四書童子訓巻之一 大学」。尾題「四書童子訓巻之一」。字面高さ約廿三糎。每半葉十五行各行字数不等廿八字内外。全巻朱引朱点を加え、経文・朱序文には墨筆で訓点を下す。遊び紙共全六九丁。尾に「持主高草平左衛門」なる黒印が捺してある。書写年代は寛永頃であらう。

宮内庁書陵部蔵〔江戸〕写本一冊

栗皮表紙（二七・二×一九・五糎）、外題「大学抄」。内題「四書童子訓 大学章句序」。墨雙辺（二二×一六糎）無界。每半葉十二行各行字数不等。朱点朱引を加う。全五八丁。「学習館印」の朱印。但し、兼良の童子訓は朱子序の部分のみを存し、次の経文の伝の十章までの仮名注は童子訓とは無関係の全くの別書で、「大学要略 逐鹿評上」

と題し、巻尾に「中江原書」と。「童子訓」と「要略」とは夫々別筆で、後人が両書を合綴したものであろう。この大学要略は藤原惺窩の著で、中江原は藤樹らしいが、藤樹が書写したものを後人が転写したものであろうか。

国語研究所蔵元和元年写本一冊

大本。改装のため少しく天地を截つてある。全五十丁。每半葉十一行各行字数不等。朱点朱引を附す。外題「大学抄下」。尾題「四書童子訓卷之一畢」。元来は二冊本で、上巻の朱子序の部分を失つたものである。巻末の書写奥書に、

右之抄者以清家本令書／写了／元和元仲繼上旬 平時興

国立国会図書館蔵寛文十年谷岡七左衛門刊本（巻上欠）一冊

栗皮表紙（二六×一九糎）。元題簽欠。表紙の左肩に「寛文十年四月／大学童子訓」と雙行に墨書。内題「大学」。尾題「大学童子訓終」单边（二二×一六・一糎）無界。每半葉経文八行各行十五字、片仮名交り注文小字雙行即ち十八行、各行字数不等廿五字内外。版心は粗黒口、柱刻は「大学抄下（丁数）」五十丁。首に「岡田希／雄蔵書」の朱印あり。巻末題の次に、左の木記の刊記を有する。

寛文十庚戌歲孟夏吉辰／御靈前谷岡七左衛門板行

本書は寛文十年の「書籍目録」等の江戸時代前期の出版書目には、二冊と録してあるが、筆者はこの故岡田希雄氏旧蔵本の下巻以外に、完本の所在を知らない。下巻は序を除く大学章句全体を含むから、上巻が朱子序に該当する。経文には詳細な訓点と振仮名、注文にも所々振仮名が附してあり、その訓点仮名は清原家流のそれにかなり忠実に据つている。

本書の伝本として他に、故福井久蔵博士はその著「一条兼良」（二八頁）に、阿波国文庫蔵清原環翠軒奥書本をあ

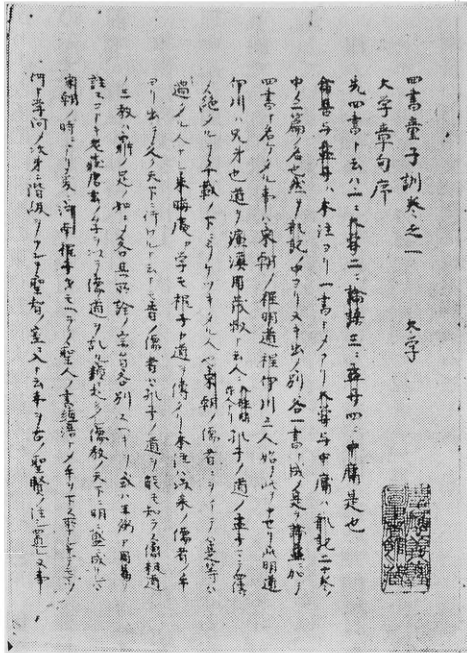
げ、また、国民精神文化研究所刊「日本書紀纂疏」の解説中に同本を永正九年写と著録してあるが、この本は戦後焼失したものと思われる。宣賢の奥書がついているというのであるから、前記慶応本と同系であろう。

室町時代を通じ、博学多識宏才絶倫を以て、自他共に許す者を挙げるならば、指を先ず一条兼良に屈さねばならぬ。神道・国典・和歌・連歌・有職故実に行くとして可ならざるなき彼は、儒学に於てもしかり。曾祖父経通、父経嗣いずれも儒を好み朱子を崇び、その母は文章博士東坊城(菅原)秀長の女である。

彼の庶兄たる東福寺の雲章一慶は、岐陽方秀門下の翹楚で、宋学について優れた功績を残している。兼良は明経家たる清原等の博士家の外に、岐陽不二道人等の学統とも関係のあつたことは容易に推測される。かゝる庭訓と環境に育つた兼良は、儒は当然程朱学を宗とし、自著「尺素往来」にも「程朱二公之新釈、可為肝心候也」と言う。彼の漢学の造詣、性理の説の撰取の程は、その著「日本書紀纂疏」等にも鮮に看取できる。併し彼の儒学思想を最もよく見得るのは本書に若くはない。

本書は、朱子の四書集註に対する国字解で、諸本いずれも、「四書童子訓卷之一大学」と題する所から見て、卷之二以下四書全巻が存したように見えるが、卷一の大学のみが伝わり、他は現存しない。兼良は四書全体に対する講義は行つたかもしれぬが、文献上では、文明十二年、即ち薨去の前年七十九歳の五月廿三日から随心院坊に於て、近衛政家・鷹司政平等の廷臣等に孟子の談義を始めたことが「後法興院政家記」に記されるのみである。後述する東福寺靈雲院蔵の烏有子著の「中庸章句童子訓」の天文二年の著者奥書には、兼良公の大学童子訓は見たが、中庸のそれは未だ見ず、それを補うために自ら輯するの意を述べているから、兼良薨後五十年にして既にその本はなかつたらしい。本書の中庸以下は亡佚と見るよりは撰述の予定にとどまつて、その実は果すに及ばなかつたのではなからうか。

本書は室町時代はかなり一部には読まれたらしいが、それも清原家や廷臣等のごく一部に限られ、江戸時代以降は学風の一変したことによるが、全く顧みられず、僅に「国朝書目」等に著録されても、人間に現われること殆どなく、たゞ足利衍述氏等二、三氏が紹介したにとどまる。本書は寛文に至つて上梓されたが、ネーム・バリユウから考えて当然大書さるべき著者名が本書や寛文の書目に録されていないことは、江戸前期既に兼良の著たるに気づかれず、その出版も、偶々目にふれた写本を見て、平易でよさそうだという見込から、当時の啓蒙的な国字俗解本の流行に乗じて出したという程度の一種の偶然性に類したらしい。その普及すること甚だ少かつたらしいことは、その伝本が殆ど存しないことから察せられる。筆者は、寛文十年の「書籍目録」等の江戸前期の出版目録に「大学童子訓二冊」と録されているのを見て、それが本書ではないかと臆測して搜索に努めたが、寛文の整板本でありながら、僅か上記の国立国会図書館蔵の巻下の零巻一冊に接したのみである。いかにこの著が湮滅に近い状態にあつたかゞ分るであらう。



訓子童子四書本写未町室蔵館書塾義応慶

本書は所謂ナリ式仮名抄の一種に属し、間々俗語を混えた甚だ平明暢達な文語体である。講義をそのまゝに筆録した聞書体ではないが、兼良の講義の聞書に手を加えて整えたように思われる。本書の成立年月は詳に知り得ないが、推定の手が

かりとなるのは前掲の東京教育大学蔵本の奥書である。同奥書には誤写があるらしく、やゝ意味が明瞭でないが、その示す所によれば、その祖本が文安元年（一四四四年、兼良四十四歳）に書写されているから、本書の成立はそれ以前で、兼良少壮時代の作と目すべきである。

本書は経文を掲出し、次に朱注を敷衍した国字解を附したものである。朱注の本髄をよく理解味得し、宋学性心の理を甚だ明晰に咀嚼し、さらりと平易な仮名文に書き下したのは、余程の造詣の深さと練熟せる蘊蓄を以てせねば不可能である。朱子序に対する注解は特に詳細で、全巻の半ば近くを占め、その中に朱子学の主要な学説の解説をほぼ尽している。兼良が本書を撰述するに当つて参考した本は、本書に自ら、

注ノ外（家蔵本「外ニ」に作る）、又或問ト名テ、問答ヲアリテ（家蔵本「借テ」）、議論スル事アリ、一書ノ奥ニノセタリ、朱子カ意ハ、或問ニ見タリ、書ヲ（家蔵本「此書ヲ」）学ハン程ノ人ノ、見スンハアルヘカラス（以下本書の引用文は慶応蔵本に拠る）

と言つている通り、朱子の「大学或問」である。本書に直接原文を引用せず、また兼良が特に明記していないが、間々引かれた例証が、「四書輯釈」中の注に吻合するものが多いから、輯釈も参照したことが知られる。

本書の叙述の態度は当時の抄物全てに通ずる如く、できるだけ分り易く講述することで、説明には卑近な例をとつて難解な性理の学説を論ずることに成功し、朱子学概論の入門書として見ても本書は今日に於ても稀に見る名解説書である。その身近な喩から説き起す一例に、伝十章の絜矩之道の「所悪於上、母以使下云々」の箇所から引用してみよう。

先年、ハヤシモノ、風流ト云事ノアリシニ、或人、見物ニ出テ、路ノ傍ニ立タルニ、又見物ノ人ノ有カ、我物見

ル前ニ、ウチフタキ（家蔵本ウチフサキテ）、ヲノレヒトリ見、トラント、シタル気色也、ウツシノ此後人（家蔵本後ノ人カ）、カタハラへ、チト（家蔵本チツト）ノカレヨト云、タレトモ、ツイニ、聞入ス、然ニ又、我ウシロニ立テ、見物スル人アリ、我ニハ、ノケトモ云ネトモ、我カ前ニ立タル人ヲ、心ナキ（家蔵本心ナノ）人ヤト、我思フ如ク（家蔵本我カ思ウカ如ク）、後ノ人モ、我ヲサコソ、思ラメト思ヤリテ、其所ヲ、タチノキタリキト（家蔵本「ト」無し）、後日ニ、或人（家蔵本この二字無し）、我ニカタリシカハ、其時、此章ノ、所悪於前母以先後ト云文ヲ、引テ、或人ニカタリシカハ、コノ人、大ニ、ヨロコヒキ、イサ、カノ事ナレトモ、道ニ叶フ心ハ、如此、々或人ノ心ヲ（家蔵本コノ人ノ意ヲ）、人々ニ（家蔵本「ニ」の字無し）、モツナラハ、絜矩ノ道、天下ニ行シテ（家蔵本ヲコナワレテ）、太平ヲ得ン事、日ヲ廻スヘカラス、今、三八、是ヲ以テ、准シテ、知ヌヘシ、イツレモ、我心ヲ以テ、人ノ心ヲ、オシハカリテ（家蔵本オシハカル）、思ヤリアレト也、

兼良は当時的一般風潮と同様に、神儒仏三教一致の論に立ち、その説は「書紀纂疏」や「樵談治要」にも展開されるが、本書に於ても随所に見られる、併しそれは当代に往々見られた如き安易粗雑な一致論ではない。兼良は儒仏老の相違を説明して曰く、

異端トハ、別ニ、一ノ端ノ（家蔵本「一端ノ」）、道理ヲ立テ、吾聖人ノ、大中至正ノ旨ニ（家蔵本「至正」の二字無し）、タカヘルヲハ、ミナ、異端トハ云（家蔵本「ハ」の一字無し）、（中略）老氏虚無ノ道ハ、漢ノ世ニヒロマリテ、晋ノ世ニ、サカリ也、仏ノ教ハ、後漢ノ世ニ、西來シテ、梁唐ニサカリ也、今ニ至テ、異端ト云ハ、専、老仏ノ教ヲ云ヘリ、故ニ、此序ニハ、異端ノ虚無、寂滅ノ教ト、誦ツクヘキ也、虚無ト云ハ、道ノ名也、道、生一、々生二、二生三、ト云ヘリ、一トハ大極ノ、一氣、二トハ天地ヲ云、三トハ人ヲ云ヘリ、天地人ノ生スル事ハ、遙ニ、

以後ノ事也、太極ノ一氣ト云モ、虚無ノ道ヨリ、生セリ、故ニ、天地、万物、悉ク、空虚ニ皈シテ、是非トモニナシト談セル宗也、寂滅トハ、仏ノ理也、涅槃ノ、諸行無常是生滅法生滅々已寂滅為楽ト云、寂滅ノ二字ヲトテ（家蔵本トツテ）、名タリ、因縁生ノ法ハ、生滅無常ニシテ、苦ヲ離レス、只寂滅ノ一理、無常（家蔵本無為）安楽ノ地也ト云心也、此二教ヲ、儒者ヨリ、異端ト付タル心ハ、儒教ト云ハ、天地万物ノ上ニ具スル、当然ノ理ヲキワメ、君臣・父子・日用彝倫ノ外ヲハ、出サルヲ、道教ハ、天地未分ノ一氣ニ本ツキテ、万物ノ上ノ理ヲハ、是非トモニ、是ヲ論セス（家蔵本「是ヲ」の二字無し）、故ニ虚ニシテ無ナリト云ヘリ、仏教ハ、又人倫ノ常ノ道ヲ、ダラステ、奇（家蔵本弁）恩入無為ヲ以、真実ノ報恩トス、是、世間有為ノ事ヲ掃テ、无為空寂ノ法ヲ觀ス、故ニ寂ニシテ滅スト云ヘリ、道教ノ（家蔵本、道教ノ虚ハ）、虚ニシテ无也、儒教ノ（家蔵本儒教ノ虚ハ）、虚ニシテ有ナリ、周子カ無極而大極ナリト云ヘル、无極ハ、イワユル、虚也、大極ハ、イワユル、有也、仏教ノ寂ハ、寂ニシテ滅ス、儒教ノ寂ハ、寂ニシテ感ス、易ニ寂然不動ト云ハ、イワユル寂也、感而遂通天下ノ故ト云ハ、イワユル感也、茲以、二教ヲハ、異端ト云ヘリ、但是ヲハ（家蔵本コレ等ハ）、暫クノ廃立ナリ、仏ノ教ニモ、世間相常住ト云、時ハ、一向ニ、相ヲ破スルニアラス、断滅ノ空ハ、多道ノ見也、釈氏ノ空ハ、真空（家蔵本真実）也、故ニ一向空ニト、マラス、然トモ、一往ノ義ヲ、以テ、異端ト（家蔵本トハ）云也、他宗ヲ退ルハ、是ソシルニアラス、吾宗ヲ立ントテノ詞也、昌黎ハ、仏教ヲ、夷狄ノ一法ナリト云ヘリ、程子ハ、仏氏ノ言ハ、淫声美色コトク（家蔵本美色ノコトク）ニシテ、是ヲ、遠ヘシト云ヘリ、無実トハ、老仏ノ、二教ハ、或天地ノ前ヲ談シ、或ハ出世間ノ法ヲトイテ、向上ニハ、キコヘタレトモ、其証拠モナキ事也、大学ノ明德、新民ノ道ハ、是ヲ行ヘハ、天下、国家、スナハチ、治マル、是ハ、実アル事也（家蔵本也の一字無し）ト云ヘリ、

と、儒仏兩教の立場の相違をよく認め分ちながら、窮極の人生の原理に於て兩者の一致を求め、兩教の理論を巧に使い分けている。兼良はまた兩教の教説の差異を「機見之異耳」（書紀纂疏）と見る。本書に於ては、当時代の他の講説に比すれば、遙かに儒教の世間的性格、即ち修己治人の倫理的意識を鮮明に前面に出しておる。本書の注釈法にはかなり仏教の教理や仏語を使用していることについては、自ら、「今仏教ノ理ヲ以テ、是ヲ云ハ、全ク、程朱子カ意ニ非ス、タ、当世ノ人ノ（家蔵本「ノ」の一字無し）、カレニヨテ（家蔵本ヨツテ）、コレヲ、サトルコトヲ得ン（家蔵本得ンカ）、タメ也」と云う。

室町時代の仮名抄の大部分は字句の解釈の穿鑿に細かいが、要するに字義の講釈にすぎない。しかるに本書はそれにとゞまらない。伝の首章の「克明_レ徳」を解して、「此三字ハ、克ノ字ニ、眼カアル也、明德ノ明ニナルト明ニナラサルトハ、己カ、克ト、不克トニヨル也」と注意し、伝二章の「湯之盤銘曰、苟_レ日新、日日新、又日新」について、先、沐浴ノ方ニテ云ハ、今日湯ヲアヒテ、垢ヲ、ヨクスリ落スト云トモ、臆又、湯ヲアヒスハ、只本ノ垢ニナランスル程ニ、ソノ垢ノツモラヌ様ニ、日々ニ沐浴セヨト也、是ヲ功夫ノ方ニ、合テ云ハ、今日、私欲ノアカヲ除クトモ、又、ウチ置ナラハ、本ノ欲心ニナランスルホトニ、其欲ナル心ノ、ナ（家蔵本キ）サ、ルヤウニ、毎日、毎朝ニ、吾心ヲ、洗ス、キテ、由断ナカレト云心ニ、銘ヲ書レタリ（家蔵本カ、レタル也）、是モ苟ノ一字ニ眼アリ、餘日々ニ、アラフトモ、最初ニ、ナマアラヒニシタラハ、イタツラ事ナリ、功夫ヲ以テ云ハ、誠信ノ心ナクシテ、大方ニ、ナサンヲハ、苟トハ云ヘカラス、

と述べる如き、実践的意識の立場から朱注の肝所をよくおさえ、その眼光がすみ／＼まで紙背に徹した読み方は本書には極めて多い。もつとも、以上引用の克・苟の二字に力点をおく解説は兼良が初めて主張した創見ではない。兼良が

参照したと思われる「四書輯釈」には既に朱子の次の語を輯録しておる。

語録、此克字雖訓能、然比能字有力、見人皆有是明德而不能明、惟文王能明之、克只是真箇会底意、

語録問、盤銘見於何書、曰只見於大學、緊要在一苟字、首句是為学入頭处、誠能日新則下兩句工夫、方能接統做去、今学者却不去、苟字上着工夫

このように兼良は先行の諸注の提擧を受けていることは言うまでもないが、常にかゝる点に意をとめておつたといふことは、即ち、本書は考えようとする者の注であることを示すものである。思想家たらんとする兼良の面目を伝えている。

本書が經文に仮名点を附してあることについて、大江文城氏は、兼良が明經家の祕伝のヲコト点に倣わず、学問の祕密を排斥して敢然と点法を公開したのはその大きな功績で、「兼良の地位学識があつて、始めて之をなし得るのである。」（「本邦四書訓点並に注解の史的研究」七五―七六頁）と言われたが、此は些か鼻負の引き倒しの感がある。大江氏の使用した写本が兼良の自筆本か確實にそれに準ずるものと認められぬ限り速断できぬことである。本書の現在伝わる前記の諸伝本について、その訓点を比較検討するに、各本によつて夫々かなりの出入異同詳略の差異が見られ、慶応本にはヲコト点が附してあり、いずれも後人が夫々附したものと見るべきで、現存の資料のみを以てして兼良が加えた訓点を正確に辿り得る確実な証本を見出すことはでき難い。現存本の点は概ね清原家点に合致し、兼良も恐らく当時行われた清原点に殆どよつたものと思われる。もつとも、既に引用した如く、朱子序の「異端虚無寂滅之教」を、兼良は「異端ノ虚無、寂滅ノ教ト、読ツクヘキ也」と言っているが、清家点は「異端虚無寂滅ノ教」と訓じているような特別の少異はあつたことと思われる。ちなみに本書の上記の各伝存本は東京教育大本を除き、いず

れも清家点の如く訓じ、兼良の主張する点を附していない。

之・而の如き助字は、古来の博士家の訓法では「休言葉」として、大体読まないのを原則とした。此に対し、岐陽の流れを汲む桂庵文之等の所謂薩南学派はその不合理を非難して、一字も落さぬよう必読することを主張した。兼良も新注に於ては、之・而の助字を単なる「置字」と軽視すべきではなく、重視して読むべき所以を、朱子序の「然其氣質之稟、或不能齊、是以不能皆有以其性之所有而全之也」を解する箇所にて、次の如く詳論しておる。

皆ト云ハ、ヲシナヘテ、コトノクナト、云心ナリ（家蔵本ナント、云）、其性ノ有トコロトハ、人ノ性ニ、具足セル、仁義礼智アルヲ、誠ニ具足セリト迷ヘル者ハシラヌ也、全トハ（家蔵本全ト云ワ）、性ニ具セル所ヲ（家蔵本具オルトコロヲ）、一分モカ、ス、アリノマ、ニ、事ニ行イアラハスヲ、全トハ、云ヘリ、大学ノ工夫ハ、上ニ記ル（家蔵本上ニモシルス）如ク、知ト行トノ二ニハスキス、爰知ト云ハ、知ナリ、全ト云ハ、行ナリ、知ハ、致知格物也、行ハ、誠意正心脩身也、朱子カ文章ノ一字ニテモ、ステ筆ノナキハ、カ、ル処ニテシルヘシ、本注（筆者注・所謂る古注の意）ニ（家蔵本ニハ）、而ノ字ナトノ（家蔵本而ノ字、之ノ字ナントノ）、ヤスメ詞ヲ（家蔵本コトハヲハ）、訓ニハ読マス、新注ニ点ヲ加ハ、語助ノ字ニテモ（家蔵本語ノ助ノ字マテモ）、ヨマル、程ノ辞ヲハ悉ク読ヘキナリ、其故ハ、本経ヲハ必、ソラニ誦スヘキモノ也、其字ヲ落シテ、誦ツレハ（家蔵本ヨミツクレハ）ヤスメ字ノ在所ヲハ、ソラニハヲホヘヌ（家蔵本オホヘス）、別ニ、又文章ヲナス為ニモ、益ナキ也、且ハ、又、ヤスメ字ト云ハ、皆、詞ハ虚ナレトモ、ヲキ所ニヨリテ、躰アル字ニナリ、今此ノ全ト云ヘル之ノ字ハ、更ニ（家蔵本サラノ）、虚字ニアラス、上ノ其性之所有ト云、五文字カ、此之ノ一字ニ、籠ルナリ、細云ハ（家蔵本クワシクイハ）、知其性之所有全其性之所有也トカク云ヘケレトモ（家蔵本云ノ一字無し）、文章ノ習ナル程ニ、

詞ヲ省也、サテコソ、知ト全トノ二字ニ（家藏本二字ハ）、相對シテ、知行ノ二ニハ聞ヘタレ、而ノ字ヲモ、シカフシテト、読マスハ、此所ニ、此助詞ノアルヲモ、ソラニハ、人シルヘカラス、殊ニ、此ノ而ノ字、コ、ニテハ（家藏本コ、ニハ）、肝心ノ字也、其故ハ、一部ノ大学ハ、知行ノ二也、聖人ハ、生知安行トテ、知事ヲ、マタスシテ、則ヲコナヘハ、皆、ノリヲ越ヌ也、知ト行トニ、先後次第ナシ、学者ハ、先ヨリ知テ、サテ後ニ行ヘハ、知ハ先、行ハ後ニアリ、コ、ノ、而ノ字ハ、知ト行トヲ分テイフテ、学者ノ聖人ニ、コトナル事ヲ顯ス也、サテ、此下ニ、惣〔聰〕明叡知ニシテ、尽其性者ト云ハ、聖人ヲ云リ、爰ニ而ノ字ヲ加ヘサルハ、先ニ、云ノル、生知安行ノ証也、本注ヲ読メル例ナラハ、此而ノ字之字ヲ（家藏本之ノ字ヲモ）、落シテヨムヘシ、サル時ハ、此字カ、イタツラモノニ成テ、深キ義理ノアル事ヲ、人シルマシキ也、故ニ、新注ヲ、学ハン者ハ、一字ノヤスメ詞ヲモ、残サス誦ヘキ也、

こゝに煩を厭わず、敢て長文を引用したのは、兼良の読法の由つて発する動機が、「桂庵和尚家法倭点」等の如き形式的な文法語学上の訓読法のそれとは依つて立つ地盤の次元を異にしている点を明確にしたい為めである。即ち兼良の主張は全く思想上内容上の玩味から来た読法に由来する点に注意すべきである。

本書を次に紹介する清原宣賢の大学聴塵や大学抄と比較すると、驚くべきことは、宣賢の抄は、本書をそのまま採用踏襲し、文章までも八、九割は殆ど同じ箇所が多い。宣賢が本書の奥書（慶応藏本）に「可祕々々」と記したのも尤もで、本書は宣賢の種本であつたのである。宣賢の抄が兼良のそれに似通つていることについては、既に大江文城氏も気づかれ、

その時代から考へると兼良は文明十三年八十歳で薨去した時には、宣賢は生れて甫めて七歳であり、その兼良の書

中の文を宣賢が襲用したことになる。併し宣賢は、明経家学中の人であり、その家説を紹述することは、伝統を重んずる家学上、一の重要条件であるから、宣賢が兼良の書中から襲用したのではなく、兼良が宣賢の先代良賢・頼季以来の家説を伝承したのではあるまいか。兼良は、書中経文には仮名点を施しているが、これは全く明経家の朱墨点を仮名点としたままで、新なる読方を立てたものではない。伝統を重んずる社会には左様でなければならぬのであつた。（「本邦四書訓点並に注解の史的研究」一一四頁）

と断ぜられた。兼良は字句の注解や朱子学の消化には清原家の講説の影響を大に受けておることは容易に推察できる。併し本書に見る如き思想的深度、平淡の如くして鋭敏な論理は、講説家にすぎぬ当時の博士家には期待すべくもない。それを端的に示すものは本書を全一的に貫く緊密渾融な文体である。その文体には生氣が動き、弾力に満ちておる。その甚深味うべき格調は創造力から湧出するもので、割裂綴合や単なる襲用からは断じて出ずるものではない。兼良の「日本書紀纂疏」は当時の神道家の卜部家の家説を襲伝しながら、全体としては兼良の創作的著述と昇華しておる。本書を襲用して割裂綴合した宣賢の大学聴塵は、形式上、また単なる注解講述書として見るならば、本書と甲乙の遜庭なき筈である。或る意味ではより完備し、より専門的となつておる。併し全巻を通読し終つて残る感銘は、宣賢のそれはいかに光彩の褪せたものであろうか。それは思想家と講釈家との差異から生ずるのである。

前記の如く、本書は朱注四書に対する邦人撰述の注としては現存最古の記念すべき文献であるが、それは亦単に年代上早いばかりでなく内容の価値からも室町時代講抄中群鷄中の一鶴の感がある。室町期の儒学の太宗が宣賢にあつたことは周知である。併し、本書は、宣賢の前に兼良が聳え、室町時代古典学の第一人者たる兼良は儒学に於ても亦室町期の一大源泉をなしていることを立証する。従来指摘されることなかつた日本思想史上注目すべきこの事實は殊

に特筆大書されねばならぬ。

(ロ) 清原宣賢撰大学聴塵

大東急記念文庫蔵清原宣賢自筆稿本一冊

淡茶褐色表紙(二七・八×二〇・五糎)。表紙の左肩に「大学聴塵 不出全」と墨書。烏糸欄(二三×一八・二糎)を施け、每半葉有界八行、經文每行十六字朱注雙行十六字、片仮名注小字雙行各行字数不整。全卷に朱点朱引句点を加え、經文朱注には朱筆ヲコト点並に墨訓点を施す。首に「船橋藏書」の朱印あり。本文七二丁、前遊紙三丁、後遊紙四丁。間々眉上或は押紙に、宣賢の孫枝賢、枝賢の孫秀賢兩人の書き入れを見る。前遊び紙二丁表に周茂叔より朱文公に至る道統図、同じく三丁表に桓武天皇延暦十七年に出された漢音を用いて呉音を用いる勿れの太政官宣を写し、その裏に孔穎達云儒之言也云々の抜書がある。以上は秀賢の筆跡、卷末の遊び紙に、枝賢の奥書、枝賢・秀賢・經賢が夫々記した講義日附の識語が次の如く存する。

右本環翠軒^草御作分之秘抄也不出即御自筆也／輒勿令他見而已／ 正三位清原朝臣枝賢

枝賢一 天文廿〇年七月於芥川城 一天正十正月於二条殿 聽聞衆二条殿鷹司殿梶井
松永彈正忠久秀発起 講尺九条殿御発起 門跡師弟御室師弟四条中御門

一天正十一年二月於東寺内 遍昭心院聴聞 官務頭正軒等也於予被用衝重
於觀智院講之 寺僧衆聴聞 度々御振舞在之祖父環翠軒／被用衝重其例也

一天正十一年二月廿六廿七廿八日講大学^{講之} 三月六日 甘露寺大納言 勤修寺／中納言 藤中納言 広橋中納言 藤右衛門督
於禁中小御所 主上并親王 御方 若宮御聴聞
四辻中將 中山頭中將／ 予鈍色 香色 袈裟 香色 表袴 藤丸菊等丞相借用之 襖袢貫

三月七日於清涼殿御学問所 昔六所殘分講大學六七八日講畢予素絹淺黃／絹袴 香袈裟 無襪

鈍衣依無所持之由積善院○○○○被免之／ 眉目也

小御所時東○子南東上御学問所清涼殿南○在妻戸御出座南○在妻戸親王并若宮素絹上南面主上仰出座右○下間

七日八日以上六ヶ度／講畢

秀賢一

慶長十二年丁未四月八日於禁中講之講堂黒戸上段 主上御座／第二間与被置見台中納言法名也足院素然／同子息侍從等聽聞也九日十日十一日／四ヶ度講之件義猶別記之

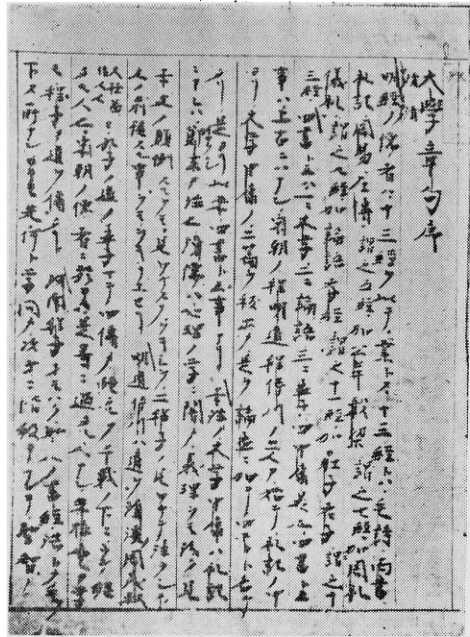
聖護院宮 大覚寺宮 中院入道前侍從

一慶長十二年六月十八日至廿五日六ヶ一 慶長十三年九月初至／五日毎日講一度講之於愚亭／北野観音坊頼玄発起 之五ヶ度也／土佐国住道寿発起也

経賢一 寛文六年三月廿九日於鷹司撰政房輔公講聽衆花山院大納言定誠卿 三条西前大納言実教卿為清朝臣八ヶ度講之

本書はその表紙に「不出」と記されてある如く、清原家の嫡々相伝の祕書だつたらしく、その転写本も他に見出されない。本書の解注の様式は、先づ経文・朱注（序は朱子序）の全文を録し、次に、経文の首数字を録出しながら、平易な文章体の国字解を下し、最後に一字を下げて注と見出しを附して、朱注の字句を解釈する。此は「聴塵」と題する他の諸経書に対する宣賢著の国字解の様式と同一である。朱序経注の本文については、精密なヲト点・返点・送仮名・振仮名を施し、家学の音を堅守させる意志から、特に紛れがちな字については、漢音清濁の別を注記してある。本書の成立年は不明であるが、他の「聴塵」類と同じく、宣賢が退官出家後の撰であろう。

本書は既に述べたように、兼良の童子訓をほゞ文章もそのまま節録割裂して少しく自説を附したもので、増加の所も字義の説明を詳しくし、参照の諸注を詳に引用した程度に止まり、内容上新色を特に加えたとは言えない。その例



大東急記念文庫清原宣賢自筆稿本大学聴塵

証の一端として、両書から大学冒頭の「子程子曰大學孔氏之遺書云々」の箇所を引用して対照の便に供そう。

大学聴塵

四書童子訓

朱先生ノ、両程氏ノ、朱先生ノ、両程氏カ言ヲ

言ヲ引用ニ、初ハ明道引用ニ、初ハ、明道伊

川ヲ書分ヌレトモ、川ヲ、カキワケヌレト

後ニハ、只程子ト書テ、モ、後ニハ、只程子ト

兄弟ノ言ニ、通用シタ書テ、兄弟ノ言ニ、通

リ、此程子ハ、難レ兄、用シタリ、其故ハ、人

難レ弟ノ、才アリテ、其ノ兄弟ハ、連枝、同胞

☆ト云ハンカラニ、此程子ハ、難兄難弟ノ才アリテ、其道同ク、其説コトナラサレハ、其名ヲ、カキワケンハ、

※道同シク、其説異ナラサレハ、其名ヲ、カキワケレハ、無念也トテ、只程子ト書テ、是ヲ通用セリ、乍去、今此

一段ノ詞ハ、小学ト云書ニテ見レハ、伊川先生ノ詞也、

言行録外集三云、二程隨侍太中、知シ州、宿二僧寺、

明道入門而右、從者皆隨之、伊川入門而左、独行、至

法堂上、相会、伊川自謂、此是某不レ及三家兄二処、蓋明

無念(家藏本無益)ナリトテ、只程子ト書テ、是ヲ、

通用セリ、サリナカラ、今此一段ノ詞ハ、小学ト云書

ニテ、見レハ、伊川先生ノ詞也、程子ト下ニ、子ノ字

ヲ置ハ、男子ノ通称トテ、人ヲタツトフ言也、孔子孟

道和易、人皆親近、伊川嚴重、人不敢近也、程子ト、下
ニ子ノ字ヲ、置ハ、男子ノ通稱トテ、人ヲ貴フ言也、孔
子孟子ナト、云カ如シ、子程ト、上ニ子ノ字ヲ書ハ、師
匠ノ義ニテ、是モ貴フ心也、子夏子遊ナト、云カ如シ、
子程子ト、上下ニ、子ノ字ヲ書ハ、貴テモ、猶タトフ也、
公羊伝ノ注、子沈子ト書タル例也、孔氏之遺書トハ、孔
子ノ残シ置レタル經ニテ、曾子カ門人ノ記セル也、初学
トハ、大学舎ニシテ、十五歳ノ人ノ、初テ聖人ノ道ヲ学
フ門ニ入也、堂ニ升リ、室ニ入モ先其門ニ、ヨラスンハ
有ヘカラス、於今、若此書カ、今ニ存セスンハ、古
人ノ、学問スル様子ヲ、知事タニモ、ナカラマシ、孟子
没後ハ、儒ノ道不レ伝、此書アレハ、如レ形儒道カ殘也、
以心伝心ハ、紙墨ノ上ニハナケレトモ、其カケホシヲ、
移シテヲケハ、後世器用者カ見知之也、頼ノ字タノム心
アリ、次第トハ、三綱八目ノ次第也、余ノ書ニハ、学ノ
次第ヲハ、イワヌ故、此書ハカリニ、云故、サテハナシ、
一ツ替事アリ、平天下者先治国、治国者先齐家、齐家者

子ナト、云カ如シ、子程ト上ニ、子ノ字ヲ書ハ、師匠
ノ義ニテ、是モタトフ心也、子夏子遊ナト、云カ如シ
子程子ト上下ニ、子ノ字ヲ書ハ、タツトヒテモ、猶タ
トフ也、公羊伝ノ注、子沈子ト書タル例也、孔氏ノ遺
書トハ、孔子ノ残シ置レタル經ニテ、曾子カ門人ノ記
セル也、初学ト云ハ、大学舎ニシテ、十五歳ノ人ノ初
テ、聖人ノ道ヲ学フ、入門也、堂ニ昇リ、室ニ入モ、先
其門ニヨラスンハ、アルヘカラス、若此書カ、今ニ存
セスンハ、古人ノ学問スル様子ヲ、知事タニモナカラ
マシ、次第ハ、三綱、八目ノ次第也、論語ト孟子ト
ハ、聖賢ノ機ニ約シテ、説レタレハ、初学ノ人ノ為
ニ、カヘリテ、益ナキ事モアリ、故ニ、先大学ヲ習ハ
セテ、後ニ論孟ヲハ、ヨマスル也、又四書ノ義理ハ、
三綱、八目ノ外ヲ出ス、故ニ大学ヲタニモ、習ツレ
ハ、イツレモ、論孟ヲノツカラ、ヨマル、也、庶乎其
不差トハ、此大学ノ書ニヨテ学ハ、聖人ノ道ニ置テ、
差路スヘカラス、若又、異端ノ教ヲ学ハ、其タカハン

先脩其身ト云事ハ、何^{イシレ}ノ書ニモアリ、誠心正心、致知、事必定ナリ
格物ハ、ナシ、

而論孟子、論語ト、孟子トハ、聖賢ノ、機ニ約シテ、説レタレハ、初学ノ人ノ為ニ、カヘリテ益ナキ事モアリ、故ニ、マツ大学ヲ習ハセテ、後ニ、論孟ヲハヨマスル也、又四書ノ義理ハ、三綱八目ノ外ヲ不出、故ニ大学ヲタニモ、習ヒツレハ、イツレモ論孟自ラ読ル、也、学者、大学ノ書ニヨテ学ハ、聖人ノ道ニヨイテ、差路スヘカラス、若又異端ノ教ヲ学ハ、其タカハン事、必定也、

中庸ノ事ヲ不云ハ、中庸ハ、学浅シテハ、及カタキ故ニ、論孟ノ後ニ、序^{ツイ}ヘケレトモ略之也、易中庸ハ至テ、大事也、此書大成ノ後モ、又簡要也

本書も童子訓と同様、或問・輯釈、その外に次項に説明する「四書詳解」を参照し、その他の朱注の末疏を多数利用引証しておるが、それ等の多くは輯釈や四書大全からの孫引によつておる様である。また所々に鄭玄の旧注をも比較し参照しておる。宣賢自身、大学の講説に努力し、また子孫相ついで、室町後期の儒学の大宗の地位を占め、よく家学を維持し、清家の講説には本書が講述の台本として襲伝したために、本書は近世初期に至るまで大学注釈書の第一の権威書として、後世に影響する所多大であつた。本書は悪く解すれば兼良の童子訓の剽窃、善く解すれば増補であるが、宣賢だけに当時としては該博詳細な諸注疏の引証を示し、しかもよくまとめてあり、やはり当代の大学講抄本中の代表作の名に価する。

(イ) 清原家講説大学抄

(甲) 種本

京都大学附属図書館蔵天文廿三年写本一冊

改装新補茶色表紙（二五・五×一六・五糎）。元表紙は本文共紙、今扉となり、それに「儒門綱目」と題書。右下端に「文雄」と墨書、「大周人寮堀尾家蔵」の朱印を捺す。字面高さ約廿四糎、每半葉十一行、注一字下げ、各行字数不等。全巻に朱点朱引朱句点を附し、七七丁。巻末に「大学章句終」と題し、その次に左の書写奥書あり。

天文廿三年甲寅卯月廿七日書畢

東京大学文学部国語研究室蔵〔室町末〕写本一冊

渋引濃茶褐色表紙（二六・五×二〇・五糎）、左肩の貼題簽に「大学抄全」と墨書。包背装。字面高さ約二一・五糎。每半葉十二行各行字数不等、朱点朱引を附し、本文四七丁。前遊紙裏に十八史の書名を記す。尾題「大学章句終」。後表紙見返に、次の奥書を有す。

右抄清家累代深蔵祕説也不可有外見者也主三慶

三慶は清原枝賢の門人で、よく清家の証本や抄物を書写している。

西尾市立図書館岩瀬文庫蔵慶長十一年写本一冊

書写を同くする後掲の同文庫蔵中庸抄一冊と対になる。同書に慶長十一年の年記識語がある。栗皮表紙（二七×一八糎）。外題「大学抄」と墨書。字面高さ約廿糎。每半葉十行各行廿一乃至廿五字不等。朱点朱引を附し、首に「読書室珍藏記」の朱印、末葉に「主^た的心」の署名あり。尾題「大学章句終」。

国立国会図書館蔵〔近世初〕写本一冊

帝国図書館の茶褐色覆表紙、元表紙（二三・五×一五・五糎）は濃栗皮色、外題は「大学抄全」と朱書。字面高さ

約二・五糎。每半葉九行各行字数不等。朱点朱引を附し、全八三丁。

慶応義塾図書館蔵〔江戸前期〕写本一冊

縹色表紙（二八×二〇糎）。字面高さ約十九・八糎。每半葉十行各行字数不等二二字内外。朱点朱引朱勾点を加え全七六丁。尾題「大学章句終」。眉上に少しく追補書入あり。

慶応義塾図書館蔵〔近世初〕写本一冊

栗皮表紙（二六×一九糎）、左肩の貼外題に「大学注釈 全」と墨書。字面高さ約二三糎。每半葉十二行各行字数不等、朱点朱引を施し、四七丁。本文巻頭題下に、「住于／東濃垂水左傍寒村天海道人」の墨書があるが、これはかの慈眼大師天海の筆ではない。

東京教育大学附属図書館蔵慶安二年写本一冊

香色地墨流表紙（二三×一七糎）、外題「大学抄」。字面高さ約廿糎。每半葉十二行各行字数不等。朱点朱引を附し、五九丁。「北総林氏蔵」の朱印が巻首にあり、故林泰輔博士旧蔵本。尾に、

慶安二己黄鍾上旬写之

の書写奥書あり。

本書は、序・経伝・朱注の各首句数字を抽出して、その下に講義を筆録したゾ式仮名抄で、講義の筆録体である。

現存諸本ともその講述者を録さないが、次に引用する例証から見ても分かるように、宣賢の「大学聴塵」を講義録体にした形で、東大国語研究室蔵本の奥書によつても、清原家の講義録たることは明かである。本書は文中に「童子訓」を引用し、京大蔵本は天文廿三年写本であるから、この期間に該当する清原家の講義者は、常忠（業忠）、宗賢、宣

賢・業賢の四名である。併し、文中の「常忠ヨリ十二代前ノ頼業ト云カ、此大学ヲ礼記ノ中ヨリ別ニ一卷ノ書ニ、又キタイテ置タソレカ、文公カ序ヲ書タ、淳熙十六年ニ当タソ、其年に死タソ、意気カ叶タソ、常忠此書ヲ講スル時、云出テ落涙セラレタソ」という文勢や、また「常忠講尺云」という引用が見えるのは、その講義者が、常忠に非ずして、その子孫たることを示しておる。内容が聴塵と殆ど一致する所から見ても、本書は清原宣賢の講義録と推定するのが自然であらう。聴塵と比較する便宜上、同書の前掲引用文と同箇所を本書から左に引く。

子程子曰「上ノ子ノ字ハ、師（慶応別本師匠）ノ字ノ心ソ、貴フ義也、下ノ子ハ、男子ノ通称ソ、何レニ有徳ノ称也、程子ヲ也（慶応別本也の字なし）賞翫シテ書タソ、公羊伝ノ注、子沈子ノ例ソ、朱子カ、コノ程子カ語ヲ引用ルニ、兄弟ノ語ヲ書ワケタソ、后ニハ一ツニシテ、程子カ曰ト云タ（慶応別本書タ）ソ、其謂レハ、兄弟共ニ、才ニ於テ、勝劣ハ無レハ、云（慶応別本書）ワケテ無益チヤホトニ、通用シタル也、チト弟ハ劣タト見ヘタソ、兄ハ柔ニ、弟ハキフカツタホトニ、人カヨラナンタソ、サレトモ学ニ（慶応別本学ニ於テハ）勝劣ナケレハコソ、一ツニハ云ツラウソ、言行録外集三卷可レ考訓云今一段ノ詞ハ、朱氏カ小学ノ書ニテミレハ、伊川カ詞トミヘタルソ、大学ノコノ書

三ツ明經ノ傳者ト申ハ十三經ノ本トスル家ノ十三經ト云ハ五經ニ公羊穀梁ヲ加テ七經ノ又周禮儀禮ヲ加テ九經ノ又論語孝經ヲ加テ十一經ノ又儀禮老子ヲ加テ十三經ト云ハ是明經ノ書也サテ此大學中庸ノ論語子思子ニ加テ四書ト名ルルハ首ハカウタソ宋明ノ程明道礼記ノ中ノ大學中庸ノ二篇ヲスル出テ論語子思子ニ加テ四書ト名ケタルハ大學中庸ノ有注ハ礼記一ツヲ注シケル時ノ鄭本カ注、才ニ河南ノ西程子カ思儀公聖人ノ書經ニ注トスル者

慶応義塾図書館蔵江戸前期写本大学抄

ハ、孔子ノ遺シ置レタル書ニテ、学ニ入門戸チヤソ、今古（慶応別本古人）ノ学問ヲスル次第ヲ知ル事ハ、此大学ノ篇ニ（慶応別本篇ノ）アル謂也、孟子ノ死シテヨリ後ハ、儒道カ伝ラヌソ、サレトモ此大学テ知ルソ、ソレモ以心伝心ノ処ヲハ知ネットモ、影法師カゲヲ、ウツスホトノ事ソ、是ヲ以テ工夫シテ、以心伝心ノ処ヲ覚ラフソ、余ノ書テハ次第カナイ、有事ハアレトモ、致知、格物、三綱、八条目ノ次第ハナイソ、而論一 命吾孟子ヲハ後ニ学ヘソ、君子ノ堂ニ上ソ、室ニ入道ハ、大学カラソ、一番ヲ一步フミ違レハ、別ノ処ヘ行物ソ、中庸ヲハ云ヌソ、中庸ハ至タ大事チャホトニ、后ニ置ソ、爰ニ書ヌハ略シタソ、易ハ伝ヘイテハ知レヌソ、中庸ハ、文字ハ知レタレトモ、理ノ上カ大事ソ、イカナ至極ノ学ノ上ニモ大事ソ、学者一 学者カ、此大学ニ依テ学ハ、聖人ノ道ニタカフ事ハアルマシキ也、（慶応蔵江戸前期写本による）

本書を「大学聴塵」と比較照合すると、このように相互に詞章字句に大なる出入異同増減を見るが、内容上の大意要旨に於ては全く同一で、特に肝要な解義の箇所では文章も殆ど同じくなっている。大体から言えば、自筆本の方が詳しく丁寧で、文章体であるが、それに比すれば此は簡約で、口義筆録のスタイルが生まに出てゐる。或る箇所は本書の説明の方が詳しく意の通る所もあり、直接経文の講釈から横道にそれて、清家の家説の故事等に言及する等、両書補足し合つて宣賢の注解をよく察することができる。本書は宣賢大学鈔のうちの一異本と目し得よう。大学聴塵は宣賢が度々の講義を基礎として自ら筆を執つた著作であるのに対し、此は宣賢の講述を聴者が筆録したものを整理した類であろう。本書は講義筆記の故もあるが、聴塵より滑脱暢叙の風調を帯び、一段と練達の趣を覚えしめ、講者の力量の非凡なるをしのばしめる。此が本書の講者を、筆者が宗賢・業賢に擬せず、宣賢と推定する有力な根拠の一つである。宣賢の大学講義については、前掲の宣賢手写本「大学」奥書に自ら記した講義識語や、その他の文献によつて、

判明している年月をあげれば、永正八年（卅七歳）二月十九日皇太子知仁親王（後奈良天皇）の侍読となり進講、大永四年（五十歳）七月廿七、八月二、同四日講義（講所不明）、同五年八月九、十二、十五日講（講所不明）、天文十六年（七三歳）越前私宅に於て講義、翌十七年越前一乗谷安養寺に於て講義、翌々年の天文十九年、一乗谷に於て薨去。本書は或は最晩年の越前に於ける講義であらうか。

聴塵に於ては童子訓の書名すらあげてないが、本書には「童子訓」或は「訓云」として数ヶ所兼良の説を引用しておる。他に数条「詳説云」として「詳説」なる書を引扱しており、同書は次に紹介する宣賢の中庸抄に於ても、かなり重要な参考書として取り扱われ、宣賢抄以外の後掲の撰者未詳大学抄、前に紹介した神宮文庫蔵写本大学章句の首書書入、また文之点の流れを汲む文亀四年写論語集註（東京教育大図書館蔵）にも「詳説」が抄録書入されており、室町後期かなり重視された書であるらしい。同書はいかなる書であらうか。宋末以後明に至る間に「四書詳説」と題する書を各種の書目に検索すれば、四書詳説十卷（千頃堂書目・補遼金元芸文志・国史経籍志、撰者未著録） 四書詳説 王廉著（統文献通考経籍考） 四書詳説 蒲霍二州学正曹端著（同） 四書詳説 山西布政王廉熙陽著（同）を見出す。本書に引用する「詳説」が以上のいずれに該当するか、引用文がいずれも撰者を明記していないので、詳かではない。足利衍述氏は明の月川先生曹端の著としているが、その根拠は明かでない。たゞ推察するに、詳説が王廉の著か有名な月川先生曹端の著かにつき、朱彝尊の「経義考」巻二五六によれば、「王氏廉四書詳説□卷」と録して曰く「劉昌曰四書詳説蘇州知府況公鍾刻於府庠袁鉉序以為王廉熙陽作言熙陽丞澗池時稿留曹端家刻既成其書四出端為霍州学正移文於蘇言四書詳説乃其所著孟子中有其訂定白馬之白一段又言熙陽以坐刑不当有著書之名熙陽為山西左政使以公事死無害其為著書也端辨四書詳説為其所著可也言熙陽坐刑不当有著書之名非也」と。「詳説」なる書が我が国

の文献上に現われるのは、桂庵玄樹の次の「跋朶雲居士四書後」（上村觀光者「禪林文芸史譚」収）が恐らく初出であらうか。

近又遊于江南、窺四書詳說其余註釈粹者數部、其中猶有不得者、咨決乎學校諸先生焉、故雖大義未明、於章句訓詁之末、粗可以為童蒙之師歟

「詳說」が我が国に現存するか否か、筆者は寡聞にしてその所在を知らない。たゞ、民国廿二年刊「国立北平図書館善本書目」には、

四書詳說 □卷 明曹端撰 明正統刻本 存十四卷 大学 中庸 論語六至 孟子一至二七

を著録し、その残本の所在が知れる。詳說については後考を俟つことにする。

(乙) 種本

東洋文庫蔵文祿慶長間梵舜書写本一冊

「清家四書抄（国字解）」と新に総題を附した十九冊本中の一部。改装濃縹色表紙（二六×一九・五糎）、全巻天地を少しく裁断、裏打補修が加えてある。中庸に慶長二・三年、論語に慶長十二年、孟子に文祿二・三・四年の梵舜の奥書がある。梵舜その他の寄合書。この大学の部分は書写は二手。每半葉十行各行字数不齊。字面高さ約二二糎。朱点朱引を施してある。「子孫永保／雲煙家蔵書記」の書標が貼つてあり、即ち鹿島清兵衛旧蔵本。

本書は以下の刊写本と同系であるが、たゞそれ等の諸本になく、前掲の宣賢抄に見える文、例えば常忠が朱序を講義して落涙したという説話の如きが、数条挿入してある差異がある。

天理図書館蔵〔江戸〕写本一冊

茶褐色表紙（二六・五×二〇・五糎）、字面高さ約二一糎、每半葉十四行各行字数不等。朱点朱引を加え、全三四丁。

京都大学附属図書館（清原文庫）蔵（江戸後期）舟橋師賢書写本一冊

淡縹色表紙（二七・五×一九糎）、字面高さ約二二・五糎。每半葉十二行各行字数不等。朱点朱引を加え、全四六丁

第一種（「元和中」刊雙辺十二行）古活字本一冊（東北大学附属図書館・成實堂文庫蔵）

大木。雙辺（二二・一×一六・八糎）無界十二行、各行字数不等。版心、大黒口「大学抄」（丁数）。

第二種（「元和中」刊單辺十六行）古活字本一冊（高木文庫旧蔵。元和八年刊三体詩素隠抄と同種活字。未見）

第三種（「寛永二年」刊單辺十二行）古活字本一冊（成實堂文庫蔵。寛永二年本屋意斎開板中庸と同種本。未見）

第四種（無辺無界十二行）古活字本一冊（大東急記念文庫蔵）

大木。縹色表紙。字面高さ約二一・五糎。注低一格。朱点朱引、眉上に書入あり。遊び紙を巻の初尾に一葉ずつ補つて書入をなす。本文五十丁。

寛永七年刊本一冊（慶応義塾大学斯道文庫・東北大・京都大、その他流布多し）

大木。題簽「大学鈔」。單辺（二二・五×二六・五糎）無界。経文八行各行十六字、注文低一格小字十六行各行字数不等。版心、粗黒口、「大学抄（丁数）」。巻頭内題「大学章句序」、尾題「大学章句終」。五二丁。巻末刊記に、

寛永庚午仲夏月中道舎重刊

この本は前掲の元和頃刊単辺十六行（第二種）古活字本の覆刻整板で、經文に訓点を附刻してある。この訓点は必しも清家点によつていない。刊記に「重刊」とあるのは、古活字本に対しての意であろうか。

〔江戸前期〕刊無刊記整板本一冊（慶応義塾大学斯道文庫蔵）

大本。前掲の寛永七年板と相互に覆刻の關係にある。どちらが先行かは容易に断定しかねるが、本大学抄と対になる後掲の中庸抄の有刊記無刊記兩種本の印面から察するに、無刊記本の方が有刊記本の覆刻後次開板の如く思われる。従来本書は往々五山僧侶の撰と推定されておるが、実は清原家講述本の一種で、前掲本と対照の爲め同一箇所を用しよう。

子程一上ノ子ハ師匠ノ師ノ心也下ノ子ハ男子ノ通称也程子ヲ賞翫シテカケルナリ初ハ明道伊川カ語ヲカキワクレ共後ニハトテモ其説同キトテ只程子トカイテヒトツニ用也孔子之遺書トハ孔子ノ殘シヲケル書ニシテ初学ノ者ノ聖門ノ室ヘ入門也今日孔子ヨリ千歳ノ後ニ此書ヲ見ハ古人ノ学文ヲスル次第ヲ見ヘキ也孟子没後ハ儒道不伝此書アレハ如形儒道カ殘也以心伝心ハ紙墨ノ上ニハナケレ共其アルヲ写シテヲケハ後世器用者カ見之知之也頼ノ字ハ憑ム心アリ余ノ書ニハ学ノ次第ヲイワスシテ此書ハカリニ云テハナケレ共一ツカワル事アルソ平天下者先治国治国者先齊家齊家者先脩其身此三八何書ニモアリ正心誠意致知格物ハナシニ三綱領八条目ヲ以テ不学則俗儒ノ方ニナルナリ而一マツ大学ヲ学テ其次ニ論語孟子ヲ学ヘシ如此ハ天子ノ堂ヘ昇ラン道ハチカウマシキ也門ヲ一步フミチカヘハ余所ヘユクヘキナリ中庸ノ事ヲ不云ハ中庸ハ学浅シテハ及カタキ故ニ論孟ノ後ニ序ツヘケレ共略之也易中庸ハ至テ大事ナリ此書大成ノ後モ又簡要也庶乎一大学ノ書ニヨツテ学ハ聖人ノ道ニタカフヘカラス（寛永七年刊本による）

本書を大学聴塵と前掲抄に比較すると、引用文等を相当省略して、かなり読み易く且つ簡約化され、恰も両書の中

間に位し、平俗化されておる。併し三書はかなり出入省略の差異はあつても、内容大意の上からは毫も本易を外れず一致している。本書も講義録の一種であらうが、かなり整理の手が加わっている模様である。清原家は代々先代の抄を種本にして講義しており、特に宣賢以後は定型固定化しておるから、本書が宣賢の講説によつたか、後人のそれかは断定が甚だ困難である。本抄は古活字本の外に、整板本が二種上木され、特に寛永刊本は流布が多く、寛文初期頃迄の江戸前期の学庸注釈書、就中当時流行した国字解の啓蒙注釈書、所謂の諺解本類は全て直接間接に本書の影響を免れていない。

(二) 撰者未詳大学抄

東京教育大学附属図書館蔵〔近世初〕写本一冊

粟皮表紙(二七・五×二〇糎)。外題「大学抄」。字面高さ約二三・五糎。每半葉十四行各行字数不等二五字内外。朱点朱引を附し、経注文に訓点振仮名(間々朱筆)を附す。全四三丁。巻初に「北総林氏蔵」朱印あり、故林泰輔博士旧蔵本。

国立国会図書館蔵〔近世初〕写本一冊

帝国図書館用の覆表紙を附す、黒無地元表紙(二六・五×一九・五糎)。改装補修を加え、入紙を挿む。烏糸欄(二二×一六・三糎)。每半葉注文十二行各行字数不等。序・経・伝文は大字で、注文とは界で区分してある。巻初に「江山月荘」の寺田望南の朱印あり。外題に「大学起」と書するが、此は本書の原題名ではなく、後人が改装の際、巻初冒頭の「大学起」の小題を記したにすぎない。本写本の漢文の訓点は前掲写本と必しも一致していない。

本書は巻頭に「大学起」と題し四頁に亘つて、礼記・四書・朱注に至る成立と大学の解題を極めて和臭の強い漢文

（擬漢文と言ふべきか）を以て述べる。解注の体裁は先ず朱序・経・伝の全文を録して、その解注を述べ、次に「本註」として、朱序については倪士毅の輯釈の序注、経伝には朱注の全文を録して、その注解を下しておる。その説明は多く字義の解釈と章句の大意を明にすることに重きをおき、四書輯釈や大学或問・四書大全からの引用が多く、ゾ式の仮名注と擬漢文注とが混合しており、引証書は上記本の外に白虎通や五経の旧注、説文・釈名や旧来慣用の字書類である。本書の成立年代、撰者は明かでない。第一章の明徳の朱注「学者当因其所発而遂明之以復其初也云々」を解して、

私云所_レ発者、譬祖宗家大悟大徹之端或擊竹、或見桃花、皆_レ是所_レ發明也、推_レ以_レ及_レ人者、配_レ分_レ義也、事理者一事有二理、水具_二水之理_一、火具_二火之理_一、君臣、父子、夫婦、長幼_ハ事々物々、当然之理也、又云事理トハ譬_レ花ト云_レハ事也、紅ト云_レハ理也、極トハ極位最上ナルヲ云ソ、○止_ニ於_ニ至善之地_一者地_ニ各止_ヘキ処ヲ云ソ、僧ナラハ禅窟、儒者ナラハ、孔門也、

と云うが如きは、撰者は僧侶ではないかと測せしめる節もある。本書は宣賢抄の影響を受けていると思われる点があり、文体等から見て、室町末から近世初間の撰述であろう。勿論未だ整齊された著述と称すべきではない。このように、朱注の末疏を輯編した形態は、前掲の書陵部蔵大学・中庸輯釈の首書書入写本、後掲の中庸童子訓等と共に、江戸時代に入つてその前期に流行した首書四書大本、所謂の標註本の編輯に至る先駆をなしておることに注目すべきであろう。

一見室町時代の仮名抄とまぎらわしいものに宮内庁書陵部蔵「大学鈔一名大学啓蒙講筵草」江戸前期写本一冊が存する。巻頭「中華中道人秋瀾一鷗記之」と題する。秋瀾一鷗は日蓮宗の僧、京都常光寺第二代。妙覚寺等で盛に内外の典を講義し、慶安三年寂。本書は全く室町期の講抄の余流をうけ、宣賢抄の亜流であるが、近世初の成立である。ま

た、大東急記念文庫蔵の「大学章句〔抄〕」(一名大学註私)寛永頃写本一冊もその類で、奥書に、「〇千眨寛永六己壬如月吉辰 謹抄 是也九拜」とあり、著者の自筆稿本か。是也の伝は不明である。

四 邦人撰述中庸注釈書

(イ) 善心軒講中庸抄

慶応義塾図書館蔵〔長享延徳頃〕写本一冊

素表紙(二六×二一・三糎)、紙縫による大和綴。左肩に「中庸抄」と墨書。表紙見返しに「尙綱舎蔵」の蔵印あり、京都吉田神社司鈴鹿家旧蔵。総題を記した内題なく、巻頭から「中庸章句序 中庸ト云ハ……」という風に始まる。天地を少しく裁つて、入紙等の修補を加えてある。每半葉行数不等約二〇行、各行字数不等、紙面いつぱいに細字密行の片仮名交り走り書き。全一七丁。

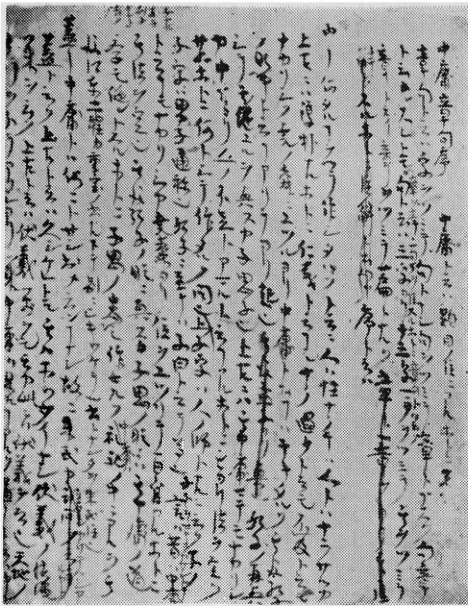
本書が嘗て鈴鹿義鯨氏のもとに在つた時、故足利衍述氏が此を閲覽し、「鎌倉室町時代之儒教」に紹介された。同家には、本書と同一同時頃の筆蹟と推定されるやはり仮名抄の「詩経抄」二冊(現所在不明)と対になつて蔵されていた。同書について、足利氏は次の如く解題して曰く、

此書は、余が見たる室町時代の詩経講義中最初のものなり、所々に、聴講の日附を記入せり、此によれば長享二年十一月廿六日に始め、延徳二年十二月一日講了せるものにて、其時の筆記稿本なり。(中略)講者は、標紙に「毛詩卷一、善心軒講」とあり。善心軒とは何人なるか、蔭涼軒日録文明十六年九月廿日の条に、「頃善心老人見講魯論漸將畢其功。以故今誦招善心老人於意足勸晚復云々」の記事あり。文明長享と、年代相接統すれば、善

応軒と善応老人とは、同一人の如く思はる、只其名字を詳にするを得ざるを憾むのみ。

再按。鈴鹿家に、此書と同一人の筆写にて、同時の講義と推定さるゝ中庸抄を蔵せり。中庸抄は、清原宗賢の講義ならんと想定せり。是に由つて、此書も或は宗賢の講にして、善応軒とは其号に非ざるか、姑く記して後考を竣つ。(八五九—六〇頁)

と。この中庸抄には聴講の年記はないが、その月日附のみはある。巻初になく、初出は三丁表の七月廿日で、以下廿四日、廿九日、八月二日、十日、廿日、廿三日で終つてゐる。



慶応義塾図書館蔵長享延徳頃写本中庸抄

本書の書写年代は筆跡・紙質から見ても正に長享延徳頃と見るべく、その年代かそれに先後する頃の講義筆録であろう。走り書きで、恐らく聴講者が受講と同時に筆録したと思われ、塗抹増削の痕が著しく、従つて文章もよく整つていない。カナ抄は元來講義の口述を筆録した所から始つたが、このように古い年代の筆記ノートの原本がウブな原形のまゝに遺存するのは、甚だ希有でもあれば、洵に尊重すべきである。

本書は朱熹の中庸章句のカナ抄で、序・経伝・章句共に、句首の文字を抄出して、その下に仮名注を附してある。その一端を引こう。

中庸 庸字ハ中字ニソヘテヲイタ字也中マテ也○

中ト云ハ一方ヘツキヨリタ物ニアラス不偏不倚ト云ハ中ノ躰也喜怒一念モ不起処也過不及名ト云ハ中ノ用也庸ト云ハ人ノ常ニ用テ可行事也天命之謂性処也子程一上ノ子ハ人ノ師也下ノ子字ハ男子通称也 不一アルク時ニネルモ走モアシイト〇〇ホトニアルケト云テ其ヲ中ト心得ハ非也事ニ依テ走リシモスヘシ事ニ随テチカワスハタラクカ庸也 中一躰也 庸一動也理ト云ヘハ其ウラニ非アルソ用也此理ヲ以テ中庸ト云テ躰用ノ二ヲアラワシタルソ此篇 孔子ノ諸経ハアレトモ此経ハ孔子ノ以心伝心ノ道也堯舜〇〇中庸道ハアル斗也然ニ子思カ後生ニ其道カ断ント思テ是ヲ書ニ筆シテアルソ孟子ハ悉云事ハ皆中庸也 其書トハ此中庸也卷処発処密ナル処弥処モアルソ卷レ之其躰ソ天命一也弥六合処モアルソ 心ヲミカク書也皆〇学也中庸ハ小ノ書トハシ云ナ終身尽ス処ハアルマイソ探リ入ントセハ一生〇此書斗ニテハツヘシ

本書の講説は主として字義の解釈に止つて、思想的な内容にはあまりわたつていないが、所々にその理解の浅からざる素養をひらめかしている。その講注は室町後期のカナ抄に往々見る衒学的繁雜の弊がなく、さらりとしていて、しかも行きとどいた所がある。当時としては相当の力量の学者の講義である。中庸章句が我が国に伝来したのは、鎌倉時代で、その後禅僧の間に流布し、特に中叡円月、義堂周信等はその詩文等に中庸の語を引くことが多いが、果してその講義が行れた否かは証すべきものがない。室町時代に入ると中庸の講筵が朝臣の間に行れたことは、後花園天皇が中原康富に学ばせ給い（「看聞記」永享十年）、花山院定嗣・三条公躬が康富或は庸頭に受講（「康富記」文安元年四月、宝徳元年二月）、三条西実世が舟橋業賢に学ぶ（「実隆公記」大永四年）等々、文献にその事例の散見するものがある。本書の講義年と推測する長享延徳前後に中庸講義の行れた事例を徴すれば、禅僧一勤（伝記未詳）なるものが、延徳三年二月に二回禁裏で中庸を講説（「実隆公記」延徳三年二月廿一・廿六日）し、また一勤は同年六月から七月

にかけて近衛邸で大学を講じ、明応六年夏には禁裏で大学を講じ、いずれも多数の縉紳が聴講している。今の所、文献の上で、本書の日附と合致する講義を傍証することはできない。又、上記のいずれの講義もその筆記は伝らず、所掲本を除いて、現存の中庸の注は室町後期に降る清原宣賢の仮名抄である。従つて、所掲本は書写の古きに於てのみならず、邦人撰述中庸注釈書としても現存最古の記念すべき伝本と言わねばならない。

本書の講述者について、足利衍述氏は、「講者は詳ならざれども、長享延徳頃の講義なると、章句が清原家本に拠れると。講義の要点が宣賢の中庸抄と同じことの三点より観て、宣賢の父宗賢の講にてはなきかと想像せり。」と推考された。本書の講述者を時代の上から清原宣賢の父の宗賢に擬されたことはさもありなんとも思えるが、未だ軽々に断定するわけにはゆかない。宗賢の父業忠は学庸を度々講義しており、宗賢も中庸を恐らく講義したであろう。またこの注も清家の講義と決して矛盾したものではない。併しながら、氏の謂う清家本は、前述の如く、清家専有とは限らず、当時一般に通用のテキストであり、章句の簡単な字句の講釈である限り要点が宣賢抄と揆を一にするのも自然の帰結である。たゞ本書の朱子の性理の学に対する講説の部分は、講義の直接の筆記体のせいもあるが、その理解が浅い感を免れない。朱子学に対する清原家の理解は、応永写の論語抄等を見ても、かなりの域に達しておる。その水準から考えると、本抄は清原家の講義と断定するには筆者は躊躇せざるを得ない。本書の講述者は、同類の「毛詩抄」の表紙に題してある、恐らく僧侶と思われる善応軒であろう。

(四) 清原宣賢著中庸抄

陽明文庫蔵〔室町末〕写本一冊

茶褐色表紙(二七×二一糎)。外題「中庸抄」。字面高さ約二三糎。每半葉十六行各行字数不等。朱点朱引を附す。

八七丁。

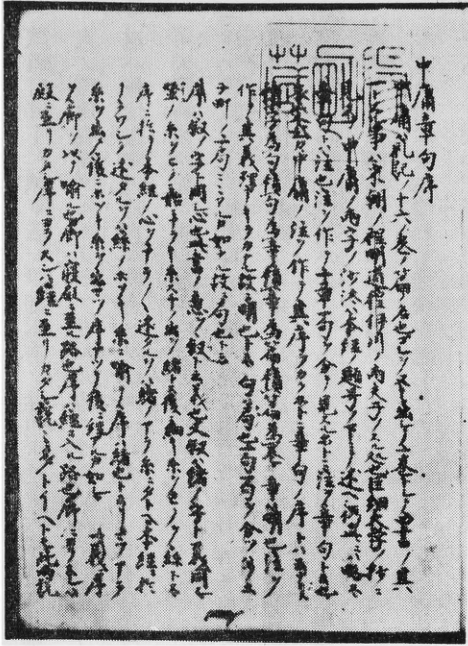
東洋文庫藏慶長三年梵舜書写本一冊

前掲大学抄と同じく「清家四書抄」の一部。書型前述の如し。字面高さ約二二・五糎。每半葉十五行各行字数不等。朱点朱引を附し、一〇八丁。末尾の書写奥書に

慶長二丁八月廿六日筆立依無愚隙透／次年戊戌九月五日遂書写功畢勿外見／許

慶長三九五 梵舜（花押）

〔朱書〕 朱点 九月廿一日



陽明文庫藏室町末写本清原宣賢著中庸抄

天理図書館藏〔江戸〕写本一冊

淡茶褐色表紙（二六・五×二〇・五糎）。外題

「中庸抄」。字面高さ約二二糎。每半葉十四行各

行字数不等。朱点朱引を附し、九九丁。故橋本進

吉博士旧蔵本。

本書は、經・伝の全文は録さず、句の首数字を標出して、その下に平易な文語体で注解し、

經の解を終つた後に、「注」と標出して、朱注の字

句を解釈する。第二十五章の「誠者自成也而道自

道也」の箇所をこゝに一例に引いてみよう。

誠者自成^一 誠ト云ハ、即本有ノ性也天地ノ大根本底ヲ誠ト云、是誠ヨリシテ、万物自然ニ成就ス、故ニ自成ト云、人ノ瑠瑑安排スルモノニアラサル也、是誠アツテ、是天アリ、是誠アツテ、是地アリ、是誠アツテ、万物アル也、道ハ無情底ノ道理也、此道ヲ行テタマハレト、道ノ方カラノソマネトモ、人カ其道ニヨツテ行フハ、道カ自然ト導イテ行ハスル如ク也。

「注」言誠^一 誠者自成、如^(難)這八草樹、所以有^(株)許多根目枝葉条幹、是自実有底、如^二三人便自有^カ、耳目鼻口、手足百骸、都是你自実有底、道須^(難)是自然底道理、然都須^(却)是你自去做始得、(筆者註 この文朱子語録よりの引用、輯釈所収) 誠以心^一 誠ハ、此心ヲ、実ニスルヲ云、誠ハ、本也、道ハ其誠ヲ行フヲ云、道ハ、理ノ上也、行フハ、用也、(天理図書館蔵本による)

本書の諸本はいずれも撰者を題しない。併し、その解注の体裁態度内容文体共に、前掲の宣賢著大学聴塵と全く同じである。且つ、当時これ程充実した内容の著述をなし得る力量を有する講師は宣賢を措いて考えられない。本書の撰者を清原宣賢と断定して恐らく不可なしであらう。宣賢の易・書・詩・学・論・孟に対する聴塵と同類の注釈書はいずれも自筆稿本の伝存を見るが、論語中庸に関する限り不幸自筆本が未だ発見されない。本書のみが他の聴塵と異つて経文を全載せず、或は文中「詳説」を引き、他に似ず「詳説云々可引載」の如き雙注の記載に止つて、一部原文の引用に及ばない点等から推測をめぐらせば、或は未定にとどまつて、定稿の清書に及ばなかつたとも想像される。

本書が国字解に際して参酌した注釈書は、自ら記す所では、四書輯釈、元の陳櫟の「四書發明」、元の胡炳文の「四書通」、元の王元善の「四書通放」であるが、文中に現れた所では、朱子の語類或問、他に「四書詳説」等で、宋元の諸氏の説も往々引くが、それ等は四書大全や輯釈に拠つたものと見てよい。本書は字義や朱子の性理の学理について

も甚だ委曲を尽した解釈を下し、諸氏の説や出典は原文を引証すること詳細で、四書中最も形而上学的で説明しにくい中庸の哲理を明解にくだいた講釈は心にくい程である。大体から言えば、四輯釈をよく咀嚼し融解した和訳である。中庸の啓蒙的注釈書としては、江戸時代の羅山以下のそれ等に比して決して遜色なく、白眉の一つである。

(イ) 清原家講説中庸抄

竜谷大学図書館蔵天文十九年写本一冊

褐色表紙(二五・五×一九・五糎)。字面高さ約二二糎。每半葉十四行各行字数不等。朱点朱引を附し、五八丁。卷末書写奥書に、

天文十九年二月十二日絶筆

京都大学附属図書館蔵天文二二年写本一冊

改装。淡茶色表紙(二五・五×一七糎)。外装・筆蹟共に、前掲の大学抄(イ)本京大蔵天文二三年写本と同一で、対をなす。字面高さ約二三糎。每半葉十二行各行字数不等。朱点朱引を附し、四九丁。卷末書写奥書に、
天文廿二年癸丑極月廿六日書写訖

国立国会図書館蔵〔室町後期〕写本一冊

帝国図書館用の茶褐色覆表紙を補い、淡茶褐色元表紙(二六・五×二〇糎)。外題「中庸抄」。表紙右肩に「雲興」見返しに「雲興軒」と墨書す。朱点朱引を附す。

西尾市立図書館岩瀬文庫蔵慶長十一年写本二冊

前掲の岩瀬文庫蔵大学抄の僚卷。尾に書写奥書と目すべき「慶長十一丁未六月旬」(十一年は丙午、丁未は十二年)

の年記あり。

東京大学国語研究室蔵元和二年写本一冊

香色地表紙(二七×二〇糎)、外題「中庸抄全」。字面高さ約廿一糎。每半葉十四行各行字数不等。朱点朱引を附し、五八丁。首題「中庸章句序抄」、尾題「中庸章句鈔終」。次に左の書写奥書を有す。

于時元和二年五月吉日菅玄東先生於学窓令書写而已番易玄得

本書には他本に見ない「中庸発端」と題する中庸の総解題、中と庸との語義を詳解したもの三丁が巻初に附してある。此は宋元明諸儒の説(特に輯釈)を多く引用し、私曰、愚按等として片仮名交り文。冒頭に「中庸ノ義ハ、大学講之時詳之。」とあれば、何人かの講義録であるが、宣賢抄とは無関係で、近世初のものであろう。

東京大学国語研究室蔵「江戸前期」写本一冊

濃縹色表紙(二六・四×一九糎)。字面高さ約二五糎、每半葉十六行各行字数不等。朱点朱引を附す。他本と違つて、序経文の全文(附訓点)を録し、古写本系中庸の巻末に附してある「補音釈」四条を尾に附記する。巻頭内題「中庸章句序」の下に「泳宮ノ東禪寺」と書し、尾題は「中庸章句終并抄共」と。

京都大学附属図書館(清原文庫)蔵「江戸後期舟橋師賢」写本一冊

藍色表紙(二七・五×一九糎)。字面高さ約二四糎。每半葉十一行各行二六字内外。八二丁。内題「中庸私抄章句序」。

第一種(単辺十六行)古活字本二冊(大東急記念文庫・天理図書館「下巻欠」蔵)

栗皮表紙(二八・四×二〇・三糎)。単辺(二三×一六・五糎)無界。経文每半葉八行十六字注小字雙行。経文低

一格。版心、大黒口「中庸抄上(下) (丁数)」。卷上末題「中庸私抄」。前掲高木文庫旧蔵第二種本大学抄と同類。以下刊本はいずれも十五章までを上巻、以下下巻に分つてゐる。

第二種(寛永二年刊单辺十二行) 古活字本二冊(成篋堂文庫蔵)

未見。(刊記) 于時寛永二曆重光作噩初春吉辰本屋意齋開板焉

第三種(单辺十三行) 古活字本二冊(九州大学国語研究室・京都府立図書館〔巻上欠〕蔵)

大本。单辺(二二・五×一七糎) 無界十三行各行二五字内外。版心、大黒口、「中抄卷下(丁数)」。尾題「中庸私抄章句之終」。經の全文を録さない。

中庸私抄章句序

先此中庸ハ禮記ノ十六卷ノ篇ノ名也是シ又キ出テ一卷ノ書トシテ四書ノ中ニ八九事ハ程明道程伊川ノ兩夫子カシタソ中庸ノ二字ハ本經ノ題號ノ下ニ子ニ比ニ有程ニソコテノサタメ也章句ハ大學ノ時ノ如ク注ノ心ヲ注シ章句ト云事ハ注シ作テ一章一句ヲ分テミセタ程ニソ章句ノ序トツケタハ宋チ力注シ作テ其後序ヲ書タ程ニ章句ノ序ト云ソ章句ハ明也テ注シ作テ右儀カ明ニナル程ニ云ソ向ハ局也テ一句クソ分テ見スル事ハ假ハ局子町ノ一局ク力有テ其思盡カ鼻ル程ニソ寧ハ論語ノ序ニ叙曰ト云叙ト曰モソノ叙ハノフル也此序ニ一部ノ書ノ心ノフル程ニソ又序ハ緒也テカイコノアヲ叙ニ辟ヘ

慶応義塾大学斯道文庫蔵古活字本中庸私抄

第四種(单辺十一行) 古活字本(安田文庫蔵。焼
失か。未見)

別板单辺十三行古活字本二冊(慶応義塾大学斯道
文庫蔵)

大本。单辺(二二・一×一六・五糎) 無界十三行、各行二五字内外。版心、粗黒口、「中抄上(下) (丁数)」。
卷頭内題「中庸私抄章句序」、尾題「中庸私抄上終」。前掲本と同様十三行であるが別板。「古活字版之研究」未著録。たゞ本古活字本は、斯道文庫蔵(浜野知三郎氏旧蔵)の上巻一冊が発見されるのみで、完本の所在は知らな

い。元和頃の刊行であろう。経序文は全文を録さない。斯道文庫本は、栗皮表紙（二八×二二糎、今は新に覆表紙が補してある）は原装表紙と思われ、その裏打紙には古活字版「格致余論」の断簡が使用されておる。

寛永七年刊本二冊（慶応大・東京教育大・京大・東北大等蔵、流布多し）

大本。単辺（二一・四×一六・三糎、一部双辺を交う）無界、注文十六行、各行経文大字十六字、注文小字数数不等。経文低一格。版心、大黒口、「中庸抄上（下）（丁数）」。外題「中庸鈔上（下）」。卷末刊記に、「寛永庚午仲夏月中道舎重刊」と。本書は前記寛永七年刊大学鈔と同類で、共に第一種単辺十六行古活字本の覆刻である。

〔江戸前期〕刊無刊記本二冊（慶応義塾大学斯道文庫蔵）

大本。単辺双辺混交無界注文十六行。前記寛永七年板と相互に覆刻の関係にあり、無刊記本大学鈔と同類である。有刊記本の方が先行であろう。

本書は序・経伝・朱注の首句を摘出して、その下に講義筆録体の国字解を下したもので、刊本のように序・経の全文を載せたのは後人が附したものである。その一例を前掲の宣賢抄と同箇所をとれば、

誠ト云ハ本有ノ性ソ天地ノ大根本ノ体ソ其誠カラ万物カ長ソ人ノ成スハサテハナイ誠カラ自然ニ万物カ成就スルソ道ハ無情ソ体ハ道理ソ道カ行テ給ハレト云ハネトモ人カ行ヘハ自然ニ行ハレテユクソ、レハ道カ導クヤウナソ是ヲ事相テ云ヘハ万木ノ長シテユクハ誠ソ校根^株ノ生長ハ自然ソ○注誠以心一 心カ有テソレカ事ヲ生スル程ニ心カ本ソ

（寛永刊本に拠る）

このように、本書は前掲の宣賢の中庸抄が著者の直接の著述体であるに比し、それと殆ど同内容の講義の筆録体であつて、此は前掲の宣賢大学抄と大学聴塵との関係と全く同一で、同書に対する解説はそのまゝ本書に移すことがで

きる。本書も諸本共に講者を録していないが、宣賢が恐らく同書と同じ頃に行つた講義で、対をなすものである。前記の稿本中庸抄に比して、引用文等はかなり省略するか和訳して衍述し、全般に簡約平易化されているが、却つて本書の方にのみ見られる解説も存し、講釈の熟達枯淡の風は大学抄と同じく晩年の講義たることをしのばしめる。宣賢が中庸を講述した年月は前記の宣賢点本の中庸の奥書に自記してある通りで、本抄は最晩年天文十年代の越前に於ける講義であろうか。本書の天文十九年・廿二年の二写本は成立後間もない頃の写本であろう。

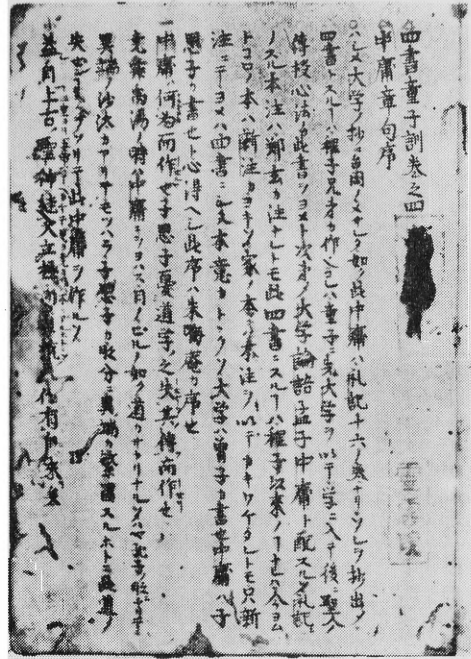
(一) 烏有子著中庸章句童子訓

東福寺靈雲院藏「近世初」写本一冊

改装。新補縹色覆表紙(二六・五×一九・五糎)。外題に「四書童子訓卷之四中庸章句全」と。元表紙は本文共紙。その左肩に「中庸抄全」と記す。元表紙・本文巻頭・巻尾に「靈雲院」の朱印を捺す。字面高さ約二五糎。内題「四書童子訓卷之四／中庸章句序。」每半葉十四行各行字数不等。朱序・経文・朱注を全録し、次にゾ・也混合体の仮名抄を記す。朱注及び国字注は経文より一字下げ、朱点朱引を附し、序・経・章句には訓点を附する。七六丁。巻末に天文二年に著者が本書撰述の趣旨を記した次の奥書を有する。

鳥有子(鳥カ)一日為童蒙校四書之次見一条台閣之所述大学抄一卷／而未見有中庸抄暇日考之本注新注採之輯釈或問等涉／
獵諸家之説而就管見之所及略記其一二以中庸章句／童子訓云中庸三十又三篇參攷相承俛以伝強以管窺解和／訓後來
君子正鳥焉(鳥カ)皆天文癸巳擲筆於避暑台下／鳥有子(鳥カ)

即ち、本書は一条兼良の四書童子訓が大学のみで、中庸がないので、それに倣つて、四書輯釈及び朱子の或問を中心として疏釈したものである。著書自ら言う如く、宋元の諸家の説をあげるが、殆ど輯釈所収のそれで、外に鄭玄注



東福寺靈雲院藏近世初写本中庸童子訓

も参照し、桃源抄を引く所が一条ある。本書は
 一々の字句の解釈よりは、各章の大意と各章間
 の脉絡を明かにし、孟子と聯貫せしめて朱注の
 性理の哲理を究めようと努力している面が窺わ
 れる。この意味に於ては、当時の抄物の多くが
 字句の平板な穿鑿に渋滞していたのに比して甚
 だ注目すべきものがある。当時の水準としては、
 かなりよく力めているが、まだ理解が未熟で透
 徹しない怨みを免れない。

本書の著者の烏有子とは誰の号であるか不明

である。併し、本書には「家ノ点」ということに度々言及し、それは清家点を指し、例えば喜怒哀楽の章の中で、

之字^{コレツ}之トヨムコト家ノナライニ、惣シテハ、ヨマヌソ、之ノ字ヲ主トスル処テヨムソ、之ト点^{コレツ}スルハ、皆家ノ点デ
 ハナイソ、此段ノ両文字ニ、カキリテ、コレヲトヨムソ、以下推^{シテ}レ之シルヘシ

と述べる態度は、著者が清原家の人たることを示しておる。前掲の清家の中庸抄と対比する為、前掲本と同じ箇所を
 本書から引用すれば、

コノ誠ト云モノハ、本有ノ性ソ、人カ雕琢安排スルモノテハナイソ、道ハ、無情底ト尺シタ、此道ヲ、行テ、タマ
 ワレト、云デハナイ、誠ト道トヲ、事理ヒテ、タトヘハ、草木ノ、出生スルカ、如シ、ソクハクノ、根カアリ、枝

葉カ、アルハ、コレ自然底ナリ、実有底ナリ、人ノ生レテ、クルモ、自然ニシテ、耳目鼻口手足百骸ノアルモ、実有底也。道モ自然ノ理ニシテ、此人カ做得タモノソ、此、人カナサスンハ、道ハアルマイソ、人アツテ、道ヲ行、コレ枝葉ノ増長スル者ナリ、ソレ、此誠字、即是天命之性、是物之所ニ以自成一、此道字是率性之道、是人之所当ニ自行、物之所ニ以自成、誠以レ心言レ本也、道以レ理言レ用也、トアルソ、コレニテ、ヨクキコヘタ、コレ人ヲカリテ、ナステハナイ、人ニ具足シタ、誠也、誠アレハ、行フノ道アリ

前掲の中庸抄とその文の類似しておることは一見して明かであろう。但しこの引用の所は相似の最たるもので、本書の悉くが意は別として、文章までこの如く似寄つてゐるわけではない。以上の所から、本書の著者は清原家の人かその親近者たることは明かであるが、それにつき足利衍述氏は、

然らば烏有子とは何人なるか、詳ならざれども、此書の章句は、清原家本によれると、訓読及講義の要点の十中の七八、宣賢の訓点及講義と相同じきより観て、烏有子は宣賢の匿名にて、其一講ならんか。然らざれば、清原家系統の学者の著ならんか。(八六七頁)

と、著者を宣賢と推測された。併し宣賢は天文二年には出家後の五十九歳の円熟老練の境にあつたのに比し、本書の講義文体には生硬の気味を残し、壮歳らしき口吻の見えるのは、宣賢の晩年の諸著作の風に類しない。仮に本書の著者を清原家に求めるならば、筆者は寧ろ宣賢の男業賢と考へたい。業賢は天文二年には卅七歳である。

本書は清原家の講抄本の一つらしいが、同家の他の大学抄と比べると異色がある。本書は清家の家本たる旧本に拠らず、新本即ち輯釈本に拠つてゐる。但しその講釈中に、新旧両本の異なる所では、それに言及し、例えば第一章天命之謂性の朱注「蓋人知己之有性而云々」の箇所に於て、

蓋以下元本ニハ別ニシルシタ、元本ニ云蓋人之所以為人(中略)所宜深体而默識也、コノ如クナルヲ輯尺本ニハアラタメテアルソ、ヤカテ輯尺ニ元本ニ如此アルトノセテ、浅深ノカハリアルト云タ、タ、シ無一本本於天而備於我ト云語カヨイト云テ、注ニカキ入タン、元本ノ如ハ含蓄シテ不尽、此本ノ如クンハ、子思カ意ヲ発スソ

と両本の得失を述べている。この引用の国字注は輯釈所収の先師(陳櫟を指す)曰云々の注を節録衍釈したものである。

又、本書の訓点はほど清原点に則っているが、所々相違がある。即ち、前言したように宣賢も家点(所謂る古点)のうち改訂すべき点を指摘しているが、本書はその改訂即ち所謂る新点通りに訓点を附して改めた所が主な差異で、古点に比すると、古点が訓読であつた所がやゝ音読の方に転じて行く傾きを見せておる。また前掲の大学抄よりも、古点の改訂について言及する条が多く、その説明も詳細になつている。第廿章の「有弗学学之弗能弗措也云々」は、従来の清家点は、「学ビ弗ルコト有ルヲハ学フ、能ハ弗レハ措カス」と訓じたのを、本書(新点)は「学ハ弗ルコト有ル時ハ之ヲ学テ能クセ弗レハ措カス」と読み、これにつき、

家ノ点ト新点トカハルソ、家ノ点ハ、一句く、云ハタシタ、有^ヲ弗^レ学^フ々々ト云テ、弗能以下ヲハ又別ニ、タイタヲ、新注ニハ、学ハヌ事ヲ、学テ、ナラヌトテハ、打ヲカヌソ、ト二句ヲ一ツニハ弁スルソ、コレカヨイソ、也ト云字カ、一句テ、之字ハ、読ソ

と説明している。

このように本書は、従来の清家の態度とは些少立場を変えて、輯釈を中心として諸家の説を参酌してなお精密に朱注を講習して、旧来の家説を再検討しようと努力する徴候を示す特色を有している。此が憚る所あつて名を烏有子に

仮託した所以であらうか。この方向は既に宣賢が道を拓き実行している所であるが、本書にはそれをより意識している傾向が見られる。元明の末疏を重視しようとする学風は江戸時代に入つてその儒学啓蒙時代を通じて益々強まり、そのあげくは四書大全風の末疏耽読の儒風に転じて行つたのは必然の径路である。当時詩文集の抄説の態度は瑣末の詞句に至るまで群注を輯集して詮索に耽る講釈であつた。室町時代の經学はまだそこ迄進まなかつた。勿論本書は諸家の説を博く跋渉するという程の注釈ではないが、經学の講義に於てもやがて煩瑣な注釈学に転じようとする微響を天文初に仄聞することは注目すべきである。

「成實堂善本書目」に「中庸鈔一卷一冊」を著録し、「室町末期写本。十二行書写。朱点附仮名講説」と。形態が室町期の仮名抄の如く見えるものに、大和文華館蔵「中庸抄」「近世初」写本一冊がある。此には角倉素庵の跋文があり、それによれば友人忘筌子なる者が細川忠利公の命により謄録編輯したと。元和末寛永頃の成立であらう。

提 要

学庸に関する現存の古写本並に邦人が撰じた注釈書類から見る時、鎌倉室町時代を通じ、薩南のごく一部を除き、その所拠のテキストは鎌倉時代夙に伝つたと思われる宋元版系の旧本に属し、朱子章句講書の参考書として最も多く使用されたのは倪士毅の四書輯釈であつた。その訓点は、王朝以来の礼記の古点に基づいて、鎌倉時代の後期には定まり、その博士家点が近世初期まで一般に襲用され、江戸時代の訓点の始源をなす岐陽・文之等の改点は室町時代はまだ一部に行われたに過ぎない。学庸の講説は清原・菅原・中原の博士家や特に五山の禅林の間に行われたが、清家には良賢・業忠・宣賢等の名儒が輩出して講説に力めた為に、他の群經に於けると同様、こゝにも清家の權威は他を

庄して、經学界の泰斗の地位を占め、訓点注釈共に我が國中世の学庸講究に関する業績一切を集成したのは清原宣賢である。その講説は章句の字義上の解釈としては委曲を尽して平易明解に解釈し、朱子学の理解もかなりの域に達し、啓蒙的な解説の役割はよく果せられておる。併し学庸章句本来の意義から見る時、堂に升つたとは仮に言い得ても、果して室に入ったとは評し得ようか。当時の学庸享受の態度はどうであらうか。

宋学が漢唐古注の儒風に対して唱導した学风は、記誦詞章の虚学に非ずして、己の為に学を求める真摯な自覚的求道心に発する天人を一貫する倫理秩序の確立にあり、即ち修己治人の儒教本来の実学の精神の覚醒にあつた。学庸は宋学の綱領条目を提示し、初学徳に入るの門、孔門伝授の心法として、特に重んぜられたのである。学庸の講習はこの革新的な儒学精神の喚起が行われてこそ、正しい享受と称し得よう。しかるに当時代の学庸の講習は、概して鄭玄の注に代えるに朱子の章句を以てし、孔穎達の疏の地位に倪士毅の輯釈を置いたまでであつて、その態度は本質的には依然として記誦詞章に踞踏する講釈の域から出たものではない。その意味に於て朱子学をその思想的な一新学派として把握しようとする自覚は稀薄である。その講義中には性道教を説き、明徳を明かにし、中和の理を高唱し、また禅僧の詩文には宋学の術語が往々用いられる。併しその性理の説は、禅意を説明する簡易な一方、その通俗版に過ぎない。儒意を説くに、俗耳に入り易からしめん為に、因習に従つて仏意を借りるとよく言われるが、実は仏意を説くに、より簡便な儒語を借りるとするのが当時の真相に近い。外典に耽ることを厳しく戒めた義堂が、為政者に語るとは云え、説くに却つて大学を以てしたのは何故か。仏を陽にし儒を陰にせざるを得なくなつた滔々たる趨勢は何を物語るか。学庸が漸次受け入れられたのは、時代が漸く仏より儒に移らんとする理を示すものではないか。何故にしかるかは別に細論したい。

記誦の講説中異彩をはなつて宋学の思想的理解に迫らんとしたのは、僅に一条兼良の四書童子訓である。併し、それも旧習を廓清して意を治国平天下に用いんとする志氣に乏しく、その工夫は性心の一偏に著する憾みを免れない。併し、それを兼良に、否、この時代に要求し期待するのは酷であり、時代錯誤であらう。

本邦儒学伝系上中世時代にその脊梁を仰ぐならば、上に花園上皇ましまし、北畠親房が控える。筆者はそれに続くものとして、従来見落された花山院長親・一条兼良の二卿を特に点綴した。長親・兼良は親房に比し豪宕の氣象はもとより同日の論ではない。升起興らんとする時代の勢は人の心を弾ませ、その志の之く所を直進せしめ、その器量を伸ばし、その功業を達せしめ易い。降り衰え亡びんとする時代の悲しさは人の心を鬱屈せしめ、その志の之く所を曲滞せしめ、その器量を蹙め、事志と反せしめ易い。室町時代知識人の要求したものは歌であり、故実であり、詞藻であった。人は当面の要需に繫縛されざるを得ない。二卿は夫々当代並びなき歌学の重鎮と仰がれ、博学宏才の古典注釈家の令名を後世に伝えた。併しそれは志の之かんとする所であつたらうか。兵連つて禍結ぶ闇は深くして晝は遠かつた。併し刻々暗は昧に移り、昧はやがて晝を迎えるは数である。字義の講釈は理解消化から創造へと進む一過程である。学庸の訓詁注釈の講釈と雖も、学庸自体が内包する精神は自ら暗々裡に受教者の機根に應じて滲透する。学庸の講誦は儒道復興の微々々々たる種子を、万世の為に太平の開かれんことを翹望する暝々たる世運に乗せつゝ、人と機との至り遭ふことを待ちつゝあつたのである。

併し文運の進展の一陽来復は自然現象の循環ではない。暗黒時代中と雖も、前を承けて後を繋ぐ思想家の出現がなければ、次代を創造する文芸復興の来復は望まれぬ。経書の文字読みの間に、また古今伊勢源氏の講筵歌合の遊芸の陰に、この時代にも亦囊中の雫を見出すことは、次の時代を予見せしめるものがある。

附記

本稿は上記の貴重な諸本の閲覽並に複写を心よく許可された所蔵者各位の御厚意の賜物である。深く感謝の意を表する次第である。所蔵者の御都合により、未だ閲覽を得ない本は、未見として掲げて推定の解説を附したが、いずれ調査の機会を恵まれた上で、補正を加える所存である。

追記

七〇頁以下の(口)清原宣賢著中庸抄に属する諸本の中で、書きもらしたものに学習院大学図書館蔵本がある。

学習院大学図書館蔵慶長十九年写本中庸鈔一冊

淡香色地表紙(二六・三×一八・五樞)。外題「中庸鈔」。巻首に、「東」「北小路」等の朱印あり。字面高さ約廿四樞。每半葉十四行各行字数不等。朱点朱引を施す。九三丁。尾題「中庸章句終」の下に、「壺隱所持之内」の墨書があり、次葉に次の奥書を有する。

大永丁亥林鐘乙卯申請家君御抄遂写功／訖大外記清原在判／

相国所齋和尚在印

慶長十九年以久望而写訖只恐倩人書／之間多謬者乎呼戲／山下立子(花押)

この奥書の大外記清原とは業賢のことで、家君とは宣賢を指す。この中庸抄の撰者を筆者は宣賢と推定したが、この奥書はそれを確実に裏書するものである。

なお、同館には江戸前期頃の写本「大学抄」一冊を蔵するが、その成立は室町時代ではなく、江戸前期に降るものである。